
異世界転生ＴＨＥ（駄）フラグ（仮題）

nakaya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界転生THE（黙）フラグ（仮題）

【Zコード】

Z5067Y

【作者名】

nakaya

【あらすじ】

俺、いつか異世界に転生するんだ……。

そんな夢を見ていた痛い男に、ゲーム中に転生する機会が訪れた。ただしメインのネカマカンストキャラではなく、モブ型倉庫キャラで！

だが異世界には自分が演じていたメインキャラの姿もあって……。どうしてこうなったんだかわかりません。

そのくらい後先考えてない転生もの、始まりますw

やのこちー（前書き）

ありがちな異世界転生ものをやつたくなつて、おかしな方向へ全力疾走中w
剣とか魔法とかある以上、流血もあるかと思ひついでご注意を。

その二十一

「なぜだあ！」

俺は両膝を屈し、両拳を激しく地面に叩きつけた。

「なんで倉庫キャラの時に…こんなっ！？」

そう、今の俺は倉庫キャラだった。

どのゲームにも、一つのキャラが持てるアイテムには限界がある。そんなときに、アイテムを預けておくためだけに作るのが倉庫キャラだ。

まあ俺の場合は、ゲームに慣れるために作った最初のキャラだけでだけなんだけど。

そんなどから、作りは超適当だ。
顔とか体とかは初期設定のまま。

メインキャラに持たせるかどうかと悩んだスキルを試すため、職業も転職ばかりで、パラメーターだって遊び丸出しで酷いもんだ。
そんな感じだから、無駄スキルも多すぎる。

というか、だ。

「こんなこともあらうかと…いや、こんなことがきっとあると言じて俺はっ！ うおおおおおつ、「ハイハイナアアアアアアア！」

魂から涙泣だつた。

ちなみに恋人の名前じゃない。

俺のメインキャラ、ディーナちゃんのことだ。

きつとある。異世界転生、きつとあるよ！

そう信じてカストしたディーナちゃん（17才・女エルフ）は、

仲間内からエロツトとかエロスとか言われるほど完璧な……ネカマキヤラだつた！

くつそ！ マジくつそーー！

女性プレイヤーからも見破れないほど、完璧な演技を身につけた俺の苦労をどうしてくれる！？

女つてのはな！ 男と体のつくりが違うんだよ！ だから立つても、背筋の伸び方とか違うんだよ！ 足運びとか違うだよー。ちょっととした仕草どころじゃないんだよ！？ 実生活にまで仕草が現れて、オカマと疑われた俺の苦労はどこ行つた！？

VRMMOの弊害、ここにあり…… ちなみに声は、変声ソフト使つてた。

「あー、マジウゼエ……」

俺、女の子になつて、可愛い子とお近づきになるんだ……。夢も希望も潰えました。

俺は右に林、左に平野、前後の地平の先に山、といつ場所を伸びる道の真ん中、立ち上がつた。

「とつあえず街行くか……」

ふらふらと歩き出す。

ぽかーんとこっちを見ていた、商人の馬車っぽいのプラス護衛団とそれを襲つていたらしい盗賊団の間を抜けて。

その二

「ちゅう、おまー?」

盗賊の頭っぽいのが、はつとしたように声を出した。
もちろん俺は……全力ダッシュだ。

「まちやがれ?」

なんで疑問系なんだよ? でも追つてくる。
馬鹿め、倉庫キャラつつても、レベルが低いわけじゃねえし。
メインキャラが装備できない、あるいは使わなくなつた、もしく
は問題が出るかも知れないアイテムを試すためにも、倉庫キャラつ
てのは存在している。

レアアイテムは、まだ受け渡しができるから良いんだが、エクス
テンド以上のものになると、基本的に受け渡しは不可だ。
そうなると、倉庫キャラ自身に取らせるしか無い。
そのため、レベルやスキルが低いつてわけじゃない。

(つつーか、ステータス見たいんだけど、この状況だとちょっとな
ー)

視界いっぱいにウインドウが開いたり、あるいはそれが他人から
見えたから最悪だ。

どう思われるかわからない。

でもまー、この足の速さだと、ステータスは改変されてないみたい
いだ。

その理由は景色の動きだ。

俺がやってたドラゴンレジョンドッグでゲームは、名前からもわか

るところ……頑張りすぎたクソゲーだった。

その一つが、余りにもリアルすぎるグラフィックだ。重すぎて一般家庭のパソコンじゃ、エフェクト一つで秒間十フレームあるかなしかのカクカクになる。

そして無駄に凝った設定だ。

世界観とかもそうだけど、めんどくさいのがスキル群だ。歩く、走る、飛ぶ、跳ねるとか、飛ぶってなんだよ？

飛べんのかよ、人？

斬る、突く、刺す……刺すと突くってどう違うんだ？

とにかく細分化がとんでもない。

その代わり、組み合わせ次第で恐ろしく面白いことができるようになる。

ネタゲーとしては……まあ、廃人になら面白いんじゃない？
たとえば外見だ。このゲームは、恐ろしいほどアバターの外装について凝ることができる。

もちろん基本パターンは用意されているし、そこから初めても良いんだけど、大抵の人間は、自分の理想のキャラを作りだそうと躍起になる。

ミリ単位で髪の長さを決め、髪の曲がり方を決め、髪型を決め、顔の大きさ、目の大きさ、鼻の大きさ、口の大きさ、それらの距離、幅を決め……。

気がつくとそれだけで飽きてしまう恐ろしさだった。

しかし、そうやって乗り越えたのが俺のカンストキャラ、ディーナだつたんだが……。

まあ、今は良い。とにかく、走るにもスキルが設定されている。ヴァーチャルリアリティが売りなだけに、走る速さが違えば、当然景色の流れ方も違うわけだ。

そこから、このキャラのステータスが、ほぼ維持されていると想像できた、けど……。

「名前、ちゃんとしとねばよかつたな」

フラグ。

それが今俺の名前だった。ちなみに某ゲームの手榴弾っぽいやつのことじゃない。

お約束、フラグから付けた名前だった。

そのさんー

振り返る。

追つてくるのは三人、向こうに残つてるのは一人。

そして護衛……あれ、冒険者とかなのかな？ は三人だ。

「なにぼけつとしてるんだ！」

叫んでやる。

「二人ぐらい、なんとかできるだろ！」

全員がはつとしたようだつた。

我に返つた盗賊よりも、護衛たちの反応の方がはやかつた。あつという間に一人を倒す。

残つた盗賊たちは、俺を追うかどうかで迷いを見せていた。立ち止まつて、前後を振り向いているところに、護衛からの火の魔法と弓矢が当たつた。

これであとは一人だけだ。

「お、覚えてるよー？」

お約束の一言を残して、逃げようとする。だが護衛がそれを許さなかつた。

束縛系の魔法が飛んで、男の足を絡め取つた。転がる音がした。

さて、どうするか？

あの商人のものっぽい馬車の中身は、姫様が禁制の品か奴隸なのか。

あるいはただの商品か。

どちらにせよ、これはありがちなフラグだろう。だから。

んじゃ！

そんな感じでシユタツと右腕を上げて挨拶し、俺は全力ダッシュで道を走った。

後ろから呼び止める声がしたけど、だが断る！

ここで安易なフラグは回収しない。

きっと後々、あなたはあの時の！ ってことになるはずだからだ。フラグは折るためにある。だけど折られたフラグはより太くなつて、俺の前に現れる！

きっとそうだと信じて、俺は明日に向かつて道を走った。

そのじー

結論。

あれ、チュートリアルでした。
いくらか走ったところで、ぽーんって音がした。
チュートリアルをスキップしました。
そんなメッセージが聞こえた。

どうことー？

つと思つたところで思い出した。

あそこで護衛たちに庇われつつ戦い方を覚えて、一緒に旅をして
細かなこと、世界観とか、お金についてとか、街での生活や野宿の
仕方についてとか……。

そんな感じのことを学んでスタートする……つことだつた。
チュートリアルを受けたのなんて、昔過ぎて忘れてた。
なんだよ無駄に期待してたのに。
いや、諦めんなよ！ ゲームと全く同じように、イベントが起
つてるとは限らないじゃないか！
そんなわけで街に到着しました。

「だけー」

質感半端ねー。

石造りの壁に囲われた城塞都市 ギガントディアス。

力と戦の神、ディアス神にちなんで名前を付けられたという街だ。
ざわざわと喧噪が激しい。

まだ外だというのに、市が立っていて、色々な人が行き交つてい
る。

「都市の中には入れないか

本物は違うなあと、壁を見上げならが人混みを歩く。

ゲームはやはりポリゴンだ。本物の壁は触るとざらつき、砂化している部分がざらりと剥げる。

俺は壁にもたれかかり、ウインドウを開いた。

人がいないところで試したんだが、ゲームと同じく、可視設定があつたんで、人からは見えないように設定した。

ステータスウインドウに、コマンドウインドウ……分離して必要なものをオブジェクト化し、見やすいように並べていく。

全部視線と思考操作だ。

VRMMOでは、思考操作は必須技能だ。

てか、ドラゴンレジェンドでは、使わざるを得ないスキルである。スキルが上がると、一定の動作が早くなる。

その上で自分でモーションを作成する。

当然スキルが高ければ、複雑で高速なモーションを作成できる。魔法なども同じ感じだ。だから、廢人であるほど、無理がなく細やかで、それでいて現実的には「ふげらわ」って感じのオリジナルコンボを持っている。

ただ……このシステム、モーションは作れても、それをコンボとしては登録できないのである。

なんで連續マクロが実装されてないんだよ、このクソゲーは。

そういうわけで、一つ目のモーションを発動中に、二つ目のモーションを思考操作で実行する……といふことができなければ、連續させたモーションをコンボとして成立させることができないのだ。まあ、幼少の頃、本気で魔法を覚えようとていた俺には簡単なことであつたがな。

どこかで読んだ小説に書いてあった。

魔法はイメージーションによつて、現実を騙す技法であると。

脳から出る波動が、現実といつ世界の量子に投影されて、世界がそれを本物だと思い込み、実際化してしまうのだといつ。そのために、魔法使いは薬を使い、朗々と呪文を唱え、トランス状態へ陥つていく。

人数が多くれば多いほど成功するのも、集団催眠といつ形で、より大きな波動を生み出せるから……らしい。

とにかくだ、自分で現実、本物だと思えないようなことが、實際になることはないって話だ。

だから、自分を見失うくらい集中し、酔うんだろう。

で、だ。

魔法使いへの第一歩は、頭に白いキャンバスを生み出すことからはじまるのだそくな。

太陽を見上げて、まぶたを閉じる。

するとまぶたの裏には焼き付きが残つてゐる。

この焼き付きを、まぶたの裏に広げていく。

これが中々難しい。

毎日寝る前に電灯を見て、電気を消して、真っ暗な中、寝落ちするまで頑張つた。

できるようになつたら、焼き付きの色を自分で選ぶ。

どんな色でも、まぶたの裏を染められるよつになるまで、やつていく。

次の段階は、妄想だ。

その白いキャンバスに、現実が騙されてくれるぐらいいの、リアルな映像を投射する。

第二段階では、まぶたを開いたまま、リアル映像を実際に見ている景色に投影する。

ちゃんとした導師、導き手がないと、この辺りで現実に見ているものと、空想とか妄想とかと、区別の付かなくなる奴が出るらしい……んだけど、俺はまあ、この辺りで諦めた。

ただ、思つたんだ。

空想が現実と見まがうほどリアルだと、現実が騙されて空想を実際化してしまうというのなら……。

リアルすぎるゲームは、リアル化する可能性があるんじゃないかなって。

それが、俺がこのドラゴンレジョンを選んだ理由だった。

余りにもリアルな作りは、本当に第一の世界、異世界だと思わせてくれるものだった。

そして俺の願いは叶つた、と言えるのかも知れない。

……ディーナの件を除いてな！

そのるべー

まあこつまでもふてくされてたつてしようがないん、今は情報収集だ。

壁際には俺と同じように座り込んでいる者たちがいる。ゲームでは露店を開いている連中（自動で商品の売り買いを行える機能を利用していた）だつたけど、見る限りでは浮浪者らしい。街に入れてもうえない。だけど街からは離れられない……危険だからだ。

そんな狭間で、行き場がない連中っぽい。
まあ、中には俺のよじに休んでいる者もいるので、彼らに間違われることはなかつた。

（問題は、金だよな）

露店で買い物をしている人たちを眺めていて、まずこことに気がついた。

もちろん金はある。倉庫キャラの使い方の一つに、メインキャラのためのバックアップ品、薬品や食料の生産つていうのがあって、そのために材料や食材を、競売や露店にて買い付けしなくてはならなかつた。

だから、そのための金を、かなり余計に持たせていたのだ。
だが、今はこの金が、問題だつた。

俺は1ゴールドを取り出して、指で弾いて、くるくると満塁するのをじつと眺めた。
落ちてきたコインを掴み、手を開いて、指でつまみ、空にかざして、観察する。

綺麗すぎた。

上からは真円、横からは平行。

鋳造の関係なのか、やり取りされている硬貨は、どれもひん曲がっていたり、欠けていた。

歪んでいて当たり前。

ちなみに、ゴールドって言つても、純金でやり取りされているわけじゃない。

混ぜ物で、比重については、取り決めもあるんだが。つまり、俺の綺麗すぎる硬貨は、偽物だと見なされる可能性が高かつた。

「どうしたもんかな……」

持ち物を売つて、得たお金でどうにかするという考えはある。ただ、ここでも同じ問題が出て来るのだ。

「高品質すぎるとか」

露天商の回復薬を眺めて確認した。

キャラクターが作成できる最低品質でも上等な部類に入るだろ。まあこれはゲームでも同じだったから、驚くようなことでもない。店売りのアイテムを買つのは初心者くらいだ。

普通は競売所に登録されるものか、露店やつてるやつから買つもんだ。

あとは、効果の問題だ。

俺が持つているものが、俺以外のやつらに効くのかどうか？

ゲームでは、NPCに対しても薬品は使えない。これは仕様の問題だったけど、効果そのものがないとなると、売つた俺の責任問題になりかねない。

どこかで試せないかなと思つたときだつた。

隣に座り込んでた親子の内の母親が、ずるずると横に倒れ伏した。

そのなー

ざわざわと騒がしくなる。

皆が徐々に距離を取る。

一度に言葉が聞き取れないので、不可視ウィンドウを開き、ログ
ウィンドウを大きくする。

スクロールする文章は、もちろん周囲の会話である。

病気、疫病、戦争、憶測が流れていく。

子供が不安げに母親を揺すっている。

親子とも、フードを深く被つて身を隠しているため、顔はわから
ないが、体つきから性別は判断できた。子供の方も女の子だ。
やべ？ フラグ？

回収しますか？ しませんか？

そんな声が聞こえた気がした俺は、しばし悩んで、接触してみる
ことにした。

「おい、大丈夫か？」

子供が不安げに母親を庇つた。

俺は無視して、母親の手を取つた。

細つせえ……枯れ木の方がマシじゃないのか？

つていうかこの手、毛だらけで……この感触、肉球なんじゃ。

フードの奥から俺を見上げる子供の顔が見えた。

怯えていて、それでも唸りを上げて、母親を守ろうとしている。

目は大きく丸く、猫っぽい鼻に、鼻の下から唇までの部分が人間
よりも少し大きく膨らんでいて、顔全体が毛に覆われている。

獣人系か。きっと耳とか怖くて伏せてるな、これ。

犬系か猫系か、はつきりとはしないが、俺が持つてゐる手は猫つ
ぽい特徴が見える手だった。

指は太め、短めで、甲の側は毛深く、鋭く伸びる爪がある。
指の腹は少し厚めで、肉球のなじりっぽい感じでふにってる。

フラグktkr、親子丼？

いや実は、逃亡獣人で、獣人と人間の戦争に巻き込まれる流れとか……ねーな。

だつたら人族が多い街なんかに来てるはずがない。
母親を抱くように支えてやる。

「おい、聞こえるか？　聞こえたなら、指で俺の手を搔け。一回だ」

俺の手のひらの内で、指がくつと曲がった。
まだ意識はあるようだ。

「助けて欲しいか？　助けて欲しかつたら一回だ」

また曲がつた。

「俺は街に入りたい。お前は病気が治つたら、入れてもうれるか？」

よし、曲がつた。

「んじゃ、最後だ。俺も一緒に連れて入つてくれるか？」

契約成立つと。

懐から取り出すポーション（無印）、まずはこいつだ。

フードを外してやる。

周りの田は気にしないでおぐ。

猫っぽくもあり、人間っぽくもある顔つきだった。

田はまぶたが閉じててわからないけど、この耳……。

まさかの虎系？

「あー……」

だから顔を隠していたのかと納得した。

希少種だ。

ちなみにドラゴンレジョンでは、獣人系のアバターは用意されていない。

男性女性以上に、骨格や体型が違いすぎて、システムの補正が追いつかないからだ。

そのくせ、NPCにはリアルすぎる動きを見せるんだから、無駄に凝つってる。

ドラゴンレジョンにおける彼らの立ち位置は、主に戦闘補助NPCだ。

契約方法は様々で、イベントで仲間になつたり、奴隸として購入したり。だがその中でも、虎種との契約は、クリア条件がかなり厳しいものだった。

端的に、プレイヤーが操作するアバターより、よほど速く動き、力も強いからだ。

高レベルプレイヤーでないと、自分自身が要らない子状態になつてしまつたため、彼らより強くないと、契約できないように調整されている。

(つてことは、無印ポーションじゃ追いつかないな……)

とりあえず、飲ませよ!とするが、猫っぽい口は受け付けてくれない。

困った……と、思つて身を引くと、子虎が不安げに俺を見上げていた。

……わかったよ。

俺はくつと小瓶を煽ると、思い切つて口を合わせた。

そのほか

……もし、この虎母が俺のモンになつたら、俺、ぜつたい歯磨きさせるんだ。

臭かつたです。

両手を突いてげーっと吐いた。

歯槽膿漏なんてもんじゃねえ、未開文明の洗礼を味わつたぜ。あと舌がめっちゃざらついてました。

母親は元気になりました。

今は万能薬を飲んでます。

ポーションで体力を戻して、万能薬で毒と麻痺と病氣を癒して、最後にハイポーションでどごめを刺す。

結果、すっげー肉付きの良い雌虎になりました。

なにこれ？

効き過ぎ怖い。

てか若いなかーちゃん。

見た目俺より若くねーか？

「元気になつて何より」

「はい」

警戒しているのか、子虎を抱きしめてこっちを見ている。

「動けるようになつてすぐで悪いけど、目立つてるから、せつねと中に入りたいんだ」

そういうわけで、強引に腕を取り、門へと向かうため立ち上がりさせた。

門まで行くと、母虎は門番に、街にいる知り合いを訪ねてきたと、メダルのようなものを見せた。

それを見た門番が、そこで待てと、番所を指定する。

門番が仲間を呼んで、どこかへやつた。

焦っている様子から、かなりの大物を呼びに行つたとわかる。

「んじゃ、俺はこい」で

「え？」

「日が暮れるまで時間がないからな、宿とか探さないと

そうですかと、母虎は微妙な顔をした。

「どうした？」

「お礼も……」

「いや、街に入るのを手伝ってくれたろ？」

「でも

「そういう契約だからな、ま、同じ街にいるんだし、そんなに宿があるわけでもないんだし、何かあるんなら探してくれ

じゃあと、言つ。

一人門番が減つたために、検問の手が足りなくなつて、忙しくなつてゐるようだ。

こちらを監視している隙がなくなつてゐるのを見て、俺はこいつそりと、一人で番所を後にした。

それで、定番の行動に出てみるか。

そのへ

とりあえずギルドへ向かう。

街のつくりは俺が知っているものと対して違わなかつた。よつて速攻で見つかつたんだが。

「ここにちはフラグを。今田は何の用意しようか?」

あつれえ?

「えと、受けてる依頼の確認に?」

「? そうですか、今受けているのは、護衛の依頼だけですね」

おつやあ?

「ファーガスまで……ござしました?」

「イイヒ、ナンテモナインテス」

ちょっと待てちょっと待て、どういうことだ?

すでに登録されていて、しかも依頼まで受けているだと? 思い出したのは、置き去りにしてきた商隊のことだった。まつじーなおい。

もし護衛の依頼つてのがあれのことなら。

俺、依頼放棄つてことになつてるんじや?

いやーな汗をたんまりとかいて立ち尽くしていると、バンッと派手な音がした。

振り向くと、ギルド館出入り口のドアが、力任せに開かれていた。

「ふ～ら～ぐ～……」

地の底からの声ってのは、あつといな声だね。俺は……固まつてしまつていた。恐ろしかつたからじゃない。

「でい、ティーナ」

ギルド館の扉を押し開いたまま両腕を突っ張つているのは、間違いない……。

「あなたなに依頼放棄なんてしてんのよー。」

手を離し、一気に距離を詰めてきた。ドアが勝手に閉まつていく。
俺は、胸ぐらをつかまれて、頭一つ低い位置から、おつそろしこ形相で睨み上げられた。

「なんで!?」

「パーティ解除してないでしょ!がー 移動先を追つてきたのよー!」

パーティ設定見てなかつたし!
パーティを組んでいると、メンバーが今、ビックのフィールドにいるのかは表示されている。
ティーナの名前があつたのか!?

「荷物番のくせに逃げ出すなんて! ビックこうつもつよー。」

荷物番！？

「それも強盗を退治して、依頼を果たしてからだなんて、やり損じやない！」

「ゴッ」とスネを蹴られた。

「~~~~!~!~」

カンストスキルでスネ蹴りとか！
俺は足を抱えてうずくまつた。

ちくしょうと思つて涙田を上げる。
そして俺は固まつてしまつた。

やべー、なにこの子、ちょーかわいー。

小さな顔に青い瞳と桜色の唇。

白いブレストアーマーを、ほどよい胸が押し上げていた。
背中には赤いマント。その上を金色の髪が腰まで流れていった。
短いスカートに、長いブーツ。間に真っ白な肌。
つまり真正面には絶対領域が！？

……抱きつきてしまつた。

……すりすりしてえ。

……枕にしてえ。

いや抱きついて枕にしてすりすりしてえ。

「俺、いつかこの太ももを、抱き枕にしちゃうんだ

ゴッと、そんな俺の顎をスキルレベル255の膝蹴りが強襲した。

そのとー

「まだガクガクする」

「うつむい！ 黙れバカ、キモイ！」

なんだよおつと、前を歩くつむじを見下ろす。

はい、だいぶ正気に戻りました。

どこに向かっているのかといつと、俺たちプレイヤーに『えられ
ている宿場町である。

長屋のような場所だ。ワンプレイヤーに一戸の宿。ゲームでは、
宿場町へのエリア切り替えで、いきなり自分の部屋となっていたん
だが、ここは現実、ちゃんと歩いて向かうことになるらしい。

ちらほらと空き家が見える。満杯になつたらどうすんのかな。
と、ディーナが立ち止まつた。

(じじが俺たちの家か)

見上げると、うほど大きくもない。

ほぼ真四角の一軒家だ。隣との間は体を捻れば通れるほどの隙間
があるだけ。

ブロックをくり抜いて作ったみたいな?
というか、窓も穴が開いてるだけ。
入り口もだ。

(空き巣入り放題じゃん?)

と思つて入り口をぐぐりとすると、一瞬魔法陣が浮かび上がつ
た。

なんの抵抗もなく、すり抜けることができたけど。

(防犯チェックってわけか)

ちなみに俺たちは、同じ家で暮らしている……らしい。
ゲームでは、別アカウントで倉庫キャラを作り、恋人設定にして
あつた。

(げ、マジかよ)

そうすることで、ハウスの保管量が、2キャラ分に増えるからだ。
そうしないと、あっちこっちの荷物をやり取りするために、キ
ャラを変えてログインを繰り返すことになる。
夫婦とか兄妹設定とかいろいろあつたけど……今俺は猛烈に悩ん
でいた。

ぱふっと、奥にある部屋のベッドに、ディーナが腰掛けた。
かちやかちやと鎧を外し出す。
俺の前だといつのに無防備で……。

(俺、こいつを好きになっちゃって良いの?)

喜んでるわけじゃない。
むしろ逆だ。

(ないわー……)

客観的に見て思った。

自分で演じてたくせこいつて話だけど、客観的に見て見ると、こん
な子、現実にいるか!? って話だった。
どう見たってキャラ作ってるよ、なんか被ってるよ。

仕草の一つ一つが媚びてキモイよ。
しかもそれやつたのが自分だつたわけにして、やべ、死にたくなつてきた。

「ぐああああああ！」

全身をかきむしりて転がつてしまつた。
ディーナがびくつと怯えて身を引くのが見えた。

（俺、こんなだつたの！？　こんなこと、男相手にやつてたの！？）

いくら最終目的が女の子とのキャッキヤウフフだったとしてもだ。
ネカマスキルを上げるための特訓だつたとしてもだ！？
なにこれ！？

確かにさつ、騙されてるー！

(*。 。 *) プブブー。

とかやつてたけどせーー！

これ、人に知られたら、俺の方がヤバくねー！？

俺の黒歴史がまた一ページ。

「な、なんなの！？」

「なんでもないです、お嬢様」

「お嬢様！？」

頭打つた！？　つて言わんばかりの態度ですね。
わかつてます。自分でもおかしくなつてます。

「それで、依頼の方はどうなつたんだ？」

俺が大きくため息を吐きながら聞くと、ディーナは……。

「ちゃんとファーガスまで送り届けました！」

「そつか、そりやよかつた」

俺一人が失敗したってことになるんだよな。
向こうまで行つて、テレビポート系の魔法で戻つて来たつて感じかな。

そんなことを考えていると……。

「なんであんたは」

「え？」

「できるべせに、途中でやめちやうのよ」

「…………」

「…………」

つつかれた、眠いと、ディーナは布団に倒れた。
大の字になつて眠る。つとする。

「なんか人の名前叫んだかと思つたら、逃げてつちやうしあ

なんだこいつ?
赤くなつてる?

「靴脱げよ

「外して～～～」

「よしわかつた！」

「えー？」

小さな体を抱え込むように覆い被さつて、膝裏に腕を入れて持ち上げパンツまる見えで逆さにしてやつたら……。

ゴツ！

肘打ち、股間に食らいました。

だから、スキル255、カンスト攻撃は、突っ込みとしてはきびしいです……ガクッ。

ステータスが君を決めるんじゃない、君がステータスを割り振るんだ！

お嬢様はギルドヘクエストに。
荷物番は街に買い物へ出かけました。

ということで街を散策中であります。

「むーん」

街並は知っているものと変わらない。ゲームと同じ視点、同じ速度で動いているからなおさらだ。

売り子や行き交う人の群れ、波が、見知ったモブとは違つくらいか。

冒険者っぽいのが何人か居るけど、俺みたいな転生者もいるんだろうか？

街の中央、噴水広場まで来て、その隅っこにしゃがみ込む。
ここは別名、シャウト広場だ。

一緒にクエストを受けませんかー？

現在ハイパー・ポーション200G！ 残り10個！

そんな声がここでも聞こえる。

「思つてたのと違つんだよなあ……」

もちろん転生の話である。

生まれ変わるとか、落とされるとか、そういう展開だと思つてた。
けど実際は、既に存在していた、フラグって人間に重なつたツボイ。

そのくせ、フラグとしての記憶がない。

フラグどこいった？

(やべー……ディーナに気付かれたら説明できねー……)

どうなんだ？

ドラゴンレジョンドに似た平行世界があつて、ゲームのドラゴンレジョンドが余りにもそつくりで、だから世界が、同じものだと混同しちゃつた、とか？

「レベル的には文句ないんだけどなあ」

『ああ、うれしいと、自分の手を見つめ、握つてみる。

ドラゴンレジョンドには、職業といつ概念がない。スキルが全てのゲームだからだ。

別に、鍛冶屋が商人として、自分で作ったものを売つても良いじやん？

魔法屋が、魔法の武器作つて売つてたって、かまわないじやん？

ただ、特定のスキルを上げて、戦士だとか、魔法使いだとか、名乗るのは自由だ。

自分を紹介するための職種欄が、ステータスの設定項目に存在している。

そこになにを書くかは自由だ。

はい、ちょっとへこんでます。

昨日、ディーナに無理矢理、荷物番づけさせられました。

んでもって、ディーナは精靈騎士となつていてる。

偏り方は、精靈魔法に七割、騎士に三割って感じだな。

ついでにレベルについて説明しておこう。

カンストカンストって言つてるけど、カンストについては一つある。

一つはスキル、もう一つがレベルだ。
スキルは使えば使うだけ上がっていく。
データのように、精靈魔法が主体なら、自然とカンストしてしまつ。

……剣技系が高いのはともかく、叩くとか殴るとか蹴るとか、突っ込み系が剣技を先回つて、カンストしてるのでどうなのよ。

まあ、ともかくだ、スキルは使ってさえいれば数値は上がる。
技能職や生産職の連中だと、戦闘系よりそっちに偏る。
最終的には、みんな255になるわけだけど。

だったら、最終的には、プレイヤー全員が、代わり映えのしない強さになるじゃないか、というとそうじゃない。
足かせがある、それがレベルだ。

レベルは初期上限が70となつていて、
けれど、レベルキャップの解放を受けることによつて、最終的に
は150が上限値となる。

解放条件は、クエストだ。

そしてレベルは、上がる度に、ステータスやスキルに加えられる、
ボーナスポイントを与えられる。

つまり、スキルを255で止めずに、上にまで持つて行けるし、
ステータスの影響によって、スキル値が同じであつても、効果や威力が変わつてくる。という現象が起ころのだ。

ステータスはHP・MP・ST/STR・DEX・VIT・AG
I・INT・MND・CHR・LUCKとなっている。

普通のゲームと扱いが違うのが、MPとSTだ。

精神力とスタミナ。

魔法はマナとかを消費するんじゃなく、詠唱のために精神力を消費し、精霊を呼び出すために消耗する、といつ理屈だ。

そしてスタミナ。

長時間連續して行動、あるいは通常以上の運動を行つていると減つていく。

少なくなるにつれて、体が重くなつていく。

VRMMOでは、ただでさえ思考とアバターの動きがシンクロしないといつのに、この足かせはかなりきつい。

俺はここを上げるために、VITにやたらとポイントを振つていた。

だつて！　スタミナですよ奥さん！？　一晩ひやつはーですよ！？
すみません、取り乱しました。

俺、いつか魔法使いになる前に、女の子啼かせるんだ。
……はつ！？　俺、現状で魔法使えるわつ、やべ！？

んまあ、とにかく、システムの話である。

このゲームは、自由にモーションを作れるけども、やはり用意されている技や魔法が存在している。

しかし、最上級のものを使えるキャラは珍しい。

それは平行職ではなく、戦士や魔法使いと言つた、特化型の育て方をしていくなくてはいけないからだ。

ディーナは精霊魔法の最上級、最大魔法を使えない。

それは冒険者的なエルフとして育てたからだ。

本物の……NPCのエルフは、精霊魔法使いとしては強大な魔法を使い、恐ろしい存在である。

しかし、それに特化していく、体力がない。
装甲も紙である。

そのくらい、ボーナスポイントの極振りを行わないと、極大魔法は使えないのだ。

しかしそれでは、ゲームをするには辛すぎる。

というわけで、ディーナの場合、腕力（STR）やら体力（VIT）にも、ボーナスを振り分けて育ててある。

そのため、格下（レベル的な意味で）の相手なら、騎士としても通用する作りになっている。

問題は俺、フラグだ。

ステータス画面を開いてため息を吐く。

「適當すぎんだろ」

L V 7 0

HUMAN

| | |
|--------|------|
| HP max | 1200 |
| MP max | 108 |
| ST max | 1024 |

| | |
|-----|-----|
| STR | 60 |
| DEX | 73 |
| VIT | 140 |
| AGI | 100 |
| INT | 41 |

MND 39

CHR 75

LUCK 102

「レベルキャップの解放クエ、受けるかなあ」

幸い、上限までにはかなり余裕がある。

「それでも、勇者にはほど遠いなあ……」

それも悩みの種だった。

着地点が見えないので裏設定を作つてみた。

このゲームには、勇者として、とこりありがちな話は定められていない。

ドラゴンレジェンドという名前の通り、ドラゴンに関する伝承、伝説、神話を追つて、世界を旅する。そういうゲームだ。

まあ、下級ドラゴン、中級、上級、そして神レベルのドラゴンと相まみえる……という流れもあるが、かかわらなくても十分遊べる。そういうゲームになつていてるのだ。

別に世界の破滅が迫つてるわけでもないから、適当に過ごしてもかまわない。

だけど、普通にしていても、日常を繰り返すだけになつてしまつ。大半が、ここでつまんねーっと投げてしまつ。

しかし、冒険とは、非日常にこそあるもんだ。
つまり、冒険を堪能したければ、非日常を選ばなければならぬ。
だから、まずは、旅立たなければならぬのだ。
街とか、ギルドとか、枠組みとかから、卒業しなければいけないんだが……。

この辺りも、クソゲーと呼ばれたゆえんだろう。

日本人プレイヤーは、基本的に、敷かれているレールを好む傾向がある。

無軌道に、たとえばギルドに加入せず、迷宮を荒らすとか。
配達クエストを妨害し、アイテムを奪うよつた、盗賊になるなど

か。

帰つてこられるかどうかわからない、異境の地へ旅立つとか。そのために、仲間を募つたり、徒党を組んだり、組織を作つたりだとか。

そういうことをしない、できない、発想がない。

だから、敷居が高すぎる、ということになつていた。

だけど、それができた奴らには、面白すぎるゲームとなつたのだ。

攻略本通りのことしかできない連中には、ひとつきにくいだけのゲームになつてしまつたんだが……。

だけど、そんな中にも、勇者、英雄と呼ばれる連中が生まれ出だ。大規模クエストなどで、勇気ある振る舞いを行い、名を売つたりだとか。

女風呂に突撃して牢屋行きになつたりだとか。

俺のことだけどｗ

勇者とは、役職のことではない。

勇者とは、勇気ある者のことと言つのだ。

だから、勇者と呼ばれなければ、勇者っぽく振る舞つて頑張つてねと言う、なにその投げっぱなし？ つて感じだつたりするんだけど……。

うん、日本メインのゲームで、それは無茶だつたね。

だつて、ヒーローっぽくとか、なにマジになつてんの？ つて話じゃん？

んで、このゲーム、基本的に、廃人とかオタク向けじゃん？ 勇者とか、斜め方向に行くに決まつてんじやんねーかｗ

あ、でも、魔王さん居ます。

ただ実装前で、設定だけだつたけどｗ

なんか光と闇のパワー・バランスが、うんとかとか、やたら凝つた設定になつてた。

光と闇は、裏と表、善と悪と同じ、等質のものであるらしい。それがどちらか一方に染まるとき、世界は滅ぶとかそんな感じで。

世界に正義の力が溢れれば、光の比率が大きくなり、世界が闇で包まれれば、闇の比率が大きくなる。

神様が信者を求める理由だそつな。

しかし、だからと言って、どちらの神様も、直接的には戦えないし、世界の動きにも介入できない。

なぜなら、光と闇は、質が違うだけで、同じものであるからだ。

つまり、光と闇が戦えば、ただの削り合いになつてしまつ。

そうなれば、残るのは、その時に質量の比率で勝つっていた側の神となる。

それも、削り合つた末に残つた、削りかすだけの存在としてだ。

ならば、どうするかと言つと、光の場合、勇者、英雄に、期待するしかないといふ。

そう呼ぶようになる者たちが、闇の勢力を押し戻し、光と闇の均衡を取り戻すことを期待するのだ。

勇者召喚ですね、わかります。

魔王招来も似たようなもんらしい。

この辺りが、大規模クエストの、裏設定となつていて。闇が溢れた、光よ、希望を取り戻せ！ ってなもんだ。逆に闇が払拭されすぎると、運営から調整という名の追加クエストがプレゼントされますw

「ディーナが居ない間に、レベル上げつとつかな……」

ディーナのレベルは150だが、カンスト組でパーティを組まないとクリアできないクエストも、多々存在している。今は、彼女が所属しているギルドメンバーと出張中だ。遠出になるので、時間がかかる。だからしばらくは一人で行動できる。

「まあ、考える時間は、たんまりとあるんだけど」

「ダメだ、やつぱり動けない。俺は浮かしかけた腰を落とした。」

クエスト……戦いに行きたくないのは、不安要素があつたからだ。これが転生なのか、デスゲームなのか、それがわからなくて困っていた。

転生なら、定期イベントやクエストが、知つているとおりとは限らない。

なにが起こるかわからないというのは、案外怖いものだった。だが、そうなると、チュー・トリアルスキップのアナウンスが、なんだつたのかという話になる。

なら、俺は、ゲームの世界に囚われて、デスゲームに参加させられているんだろうか？

しかし、それなら、ティーナの存在が不可解だ。

誰かが、俺の別アカウントで、アクセスしている？

あるいは、デスゲームを仕掛けた奴が？

だがなんのために？ 俺なんかをハメてなんの得があるっていうんだ？

愉快犯の可能性もあるが、こっちもやはり、なんの確証もない話だった。

「フラグつていう人間が、ちゃんと生まれて存在してたんなら、あのタイミングでチュートリアルつて、おかしいよな」

カンストキャラであるティーナの倉庫として、初期上限であるレベル70まで成長している以上、あれが初クエスト、というのは不自然で、チュートリアルを受けるような、素人であるはずがないからだ。

「つまり、あれは、俺に対するアナウンスだったはずなんだよな」

「どうい「う」となんだかなあと、首を捻つていると、また、あの、ぽーんって音が聞こえてきた。

『依頼：商人の護衛 結果：失敗 違約金の支払いが行われなかつたため、強制奉仕活動への召喚を行います』

「へ？」

気がつけば、がっちがちに鎧を着込んだ兵士さんたちに取り囲ま

れてました。

「？」

…ひどいゲームだな、これ。

クエスト失敗に伴うペナルティ。

これがあるのは、気軽にあれもこれもと受けただけ受けて、めんどうくさいと放り出す奴がいるからだ。

しかしこのゲームは、オンラインRPGである。

討伐系の依頼などは、一定数以上のプレイヤーが受けられないよう調整されている。

そうでないと、対象エリアでの、モンスターの沸きが足りなくななるからだ。

だがこの枠を、受けるだけ……といつ連中に埋められてしまつと、つまらない話になつてしまつ。

そこで、ペナルティがもうけられている、というわけだ。

必然的に、ペナルティは、護衛、討伐、採取、探索、調査に、尾行などの、サブクエストに限られて設定されている。

メインクエストは、失敗して当たり前の難しさだからな……くり返しチャレンジできないと、攻略法も見つけられんし。

んでもって。

「いーやーだー！」

俺が投げたのはチュートリアルレベルのクエストだつて話だ。だつて、チュートリアルをスキップしただけじゃん！ なんでペナルティがあるんだよ！？

「地下送りだけは勘弁してくれえ！」

と、王城裏手で、兵士に両脇を抱えられて『こねていた。

この街は、魔族との大戦を目的として作られた城塞都市である。その大戦は既に過去のものであるが、かなり派手な攻防があつたようだ、空に地上に地下にと、魔族の侵攻は苛烈を究めた……といふことになつてゐる。

このゲーム、細部まで凝つてるのは良いけど、全部文章ですませるのがなあ……。

んで、地下の話。

虫型の魔物が地面を掘つて都市の内部にまで侵攻したらしい。その時に掘られた穴が今も健在で、地下迷宮の様相を呈していの上、どこかに繋がつてゐるのか、魔物や、魔物とは言いがたい危険な虫などが沸いている。

でも、そこにはそれだけの場所なんだ。
お宝なんてものは無く、ただただ駆除して回るだけなんだけど。

出るんだよ。
来るんだよ。
飛ぶんだよ。
カサカサと。
ヌラヌラと。
テラテラと。

それは人類の天敵だ。

そしておそらくは眞の魔王。

その姿は闇よりも暗い黒。

人類史が始まって以来、終わることなく果てしない戦いを演じてきた、最強最悪、最初にして最後の敵。

硬くて光つて臭くて奇妙な声をあげるセーブツ。

その名を呼ぶのもおぞましく、誰もが仮称でその名を言ひ。それすなわち、『G』。

正式名ジャイアントゴックローチ。

体長一メートル前後。

知ってるか？ あいつら、腹の面つて異常にキモいんだぜ？ それを完全再現した開発チームは死ぬべきだと思う。せめて病院に入ってくれ。

んでもって、こいつら、時々は地上にも現れるため、最重要討伐対象になっている。

あほかと。

殺虫剤で殲滅しろよ。

それができないのは、こいつらが地下での掃除屋としての役割があるからだ。

食物連鎖など存在しない地道迷宮だけに、そこで出る魔物や虫や小動物なんかの死骸を駆除する、なにかしらの動植物は、根絶されるわけにはいかないらしい。

というわけで、個体数調整のための討伐が、罰ゲームとして課せられていた。

設定的には。

本当のところは、低レベルプレイヤーのレベル底上げのためだ。依頼を失敗>お前、レベルを上げて出直してこいや。

というわけで、レベルが上がるまでそこから出してもうれない
んだが……。

俺、レベル70なんです。

限界突破クエスト受けてないんですよー！

いやああああ！

もちろん救済措置はあるんだけど、100回倒すコースなんです。

やめてえええ！

しかも、現在、リアル化してるんです。

倒したって証拠も、取らなきゃならないんです。

ひいいいい！

つまり魔法なんかで、跡形もなくってのはダメで、『なんかの飛び道具じゃ、刺激するだけだろうし、暴れられたり、ましてや、飛んでこられたりしたら……。

ゾゾゾゾゾゾ！

つまり、方法としては、メイスなんかで。
ぐちゅっと。

「お願い許して、なんでもしますから、神様助けて神様！」

「そのお願い、かなえましょうか？」

神様！ つて思つて振り向いたら、悪魔がいました。

主人公がうだうだして話が進まないので相方付けてみた。（前書き）

設定の追加に伴い「そのいちー」をちょいいじりました。
（・・・）すんません・・・

主人公がうだうだして話が進まないので相方付けてみた。

レイシア・アルタイゴ。

良い感じに熟した三十才のお姉さんだ。
身長は170センチちょい。

胸もお尻もあって、着ているものはボンテージ系……らしい。
らしい、と、よくわからんのは、つねに真っ黒なローブで体を隠
しているからだ。

赤く長い髪は跳ねまくっているライオンヘアで、感情が高ぶる
とぶわっと大きく広がるという。

その時、彼女はローブをはだけ、ボンテージ的な格好で鞭を振り
上げる……という、妄想が、攻略サイトの掲示板に書き込まれてい
たが、ほんとのところは魔法使いだと知っている。

それと同時に……。

彼女はプレイヤーである。

「ねえさんっ、ねえさんじゃないか！ 生きて……」

「なにその流れ」

「いやなんとなく」

「といひあんた、タダオ？」

「やめてつー、その名前で呼ぶのやめてー。」

「ヒーリング誰がねえせんか」

「ですよねえ、歳で言つたらお母さん」

攻撃魔法が飛んできました。

「やめてー 突っ込みでギガフレイムとかやめてー。」

「誰が年増かー。」

「嫌なら、なんでそんな年齢設定にしたんだよー。？」

「ねつこいつ年頃だったのよー。」

ちなみに中の人が、リアル幼女です。
それも一桁のヒキーノ。
複雑な家庭に育つてます。

「まさか」んなことになるなんて……」

「十代と」「十代消失、おめでとう」

「やっぱ地ト行く?」

「すんませんつしたー。」

ジャンピング土下座……つていうか、このモーション、トフオで搭載されました。このゲームの開発陣、などれん……。

「つていうか、やっぱいたのか、俺以外にも

「まあね」

あ、そだ。

「なあ、俺よりも先にこっちに来てたのか?」

「そつちば、向田?」

「……12月24日」

「おんなじ」

はあつとふたりでため息いじぼした。

せつねー。

いや毎年ね、みんなね、この日の晩は、どいかの頂とか中心とかで、叫んでるだけなんですよ。

魂からの慟哭を。

しーねーばーいーのに ……リア充なんて!

「チート転生とか。神様からのプレゼントだつたりしてね」

「……やめてください、ねえさん。みんな」という優美です

「これで大体、このゲームにはまつてゐる連中のことがわかつたと思
います。」

さて。

「つてことは、同じタイミングで連れ込まれたとか飛ばされた可能性が高いのか」

「ぱりぱり」と、条件を満たしてつて、感じじやないみたいね」

ねえさんは、俺以外にも見つけてるみたいだな。
すでに話も聞いてるっぽいし。

ちなみに、俺にこのゲームを教えてくれたのは、ねえさんである。
お古のパソコンと、これまた型遅れのVRMMO対応システム一
式とでだ。

ちなみに俺は、家庭教師という名前の、家政夫だった。
単に、近所に住むお兄ちゃんとも言つ。
これ以上は、暗い話になるから、かんべんな！

んでもつて、まあ、普通にMMORPGをやつてた俺は、まずは
と慣れるためのキャラを作つた。

それがフラグだ。
後の倉庫キャラ。
ん？

「まさか、一番最初に作ったキャラに、俺、重なってるのか？」

「かもしない。あたしも、ガールでインしてたのに、レイシア
だしね」

グアルつてのは、彼女のサブキャラである。

レイシアに釣り合う、イカしたナイスガイだ。

……うん、この言い方で、もつネタキャラだつてわかりますよね。ちなみに姉弟設定だ。

「それでさ」

「ん？」

「気付かないで行っちゃつたみたいだけど、あたし、あの時いたのよね」

「あの時？」

「チュー・トリアル」

「また見逃してた！？」

「んでもって、あんた、叫んだでしょ？ なんでデイーナじゃないんだって」

それで気付いたってことか。

異世界転生してーとか言って、こいつの前で作ったキャラだからなデイーナは。

デイーナの中の人が俺だつて知つてる、唯一の人間だ。

「そいや、あん時、デイーナとレイシアと、後一人いませんでしあつけ？」

「もつといったよ？ けど、パニクつたところをやられちやつた」

あー……。

「死んだ?」

「死んだ」

やべ、『デスゲーム』かよ、これ。

ううなると、レベル70のことはやばいな、チートってほど上がりわけじゃないし。

ん?

「ねえさん」

「なに?」

「どひやつて強制イベントに割り込んだんだ?」

強制イベント? と小首をかしげられた。
嫌な笑みを貼り付けながらだった。

「なんのイベント?」

「なんのつて、クエスト失敗の」

「クエスト? 護衛任務の? ちゃんと成功させたよ?」

「……あれ? もうこいや、ディーナももう戻つてたつけ」

「うふ、でも」

「んまつと。

やべーー。

「逃げるな

すつじろばされた。

「無詠唱で捕縛呪文とかかけないで！」

「思い出した？」

レイシアは俺の前にしゃがみ込むと、両膝の上に肘をついて、両手で顎を受けてにたにたと笑った。

「P-Tでクエストを受けた場合、「敵前逃亡」やら回線落ちで逃げたバ力に対しては、リーダーが任意の懲罰クエストを強制できる。初期設定がメンバーへの違約金。次点が地下送り。でもそれじゃあ面白くないから、あたしからクエストプレゼントでもしようかなって……」

「…………ぞい見てるの？」

俺は、話からの恐怖ではない何かに、固まっていた。

「生えてる、だとー？」

いやほら。

レイシアの着てるローブって、エクステッヂより上のゴニークアアイテムなんですよ。

詳細は知らない、教えてくんないんだもん。取得条件すら不明のそれは、レイシア以外に持っているキャラを見たことがない。

リア度半端ないッス。

その性能は、俺が観察した限りでも、特定以下のダメージについては、無効にしているというものがある。

自分のレベル以下の敵の攻撃か、単純になにかの計算式ではじき出された値以下なら0になるのか、そこまではわからなかつたが。PT中に、彼女のHPの変動を観察していて、わかつたことだ。ともあれ、そういう便利なものなので、彼女はそれ以外を身につけていない。

それ以外を身につけていないのだ！

大事なことなので二度言いました！

良くいるだろ！？ 装備付けるのめんじくさくつて、裸つて呼ばれる無装備状態で移動してる奴！

彼女も、ロープ以外付けてないんです。っていうか……。

ゲームじゃなくなつたんで、パンツも脱げる。

いつもの調子で、ロープだけ羽織ってきたな、こいつ。

んでもって、俺のしょつめんに……。

俺はゆっくりと……鼻血を垂らしながら上向いた。
にっこりと彼女は笑つてた。俺たちはほほえみ合つた。

「言へ残すことば?」

「ありがとうございました」

といふえず、最後の言葉はしゃべらせてもらひえた俺だつた。

「ハラグ建築中。 しゃらぐおおがくわざご。 ハセニウー? (前書き)

投稿しようとしたらブルースクリーン食ひこました。
負けないモン! (、) 、

「フリグ建築中。しばらくおまちください。へたこつー?」

ギルド会館へ連行されマスター。

「勘弁してくださいよ、ねえさん」

「どれがいつかなー」

ショッピングのように眺めてるのは依頼掲示板だ。

討伐：亜竜族 ブラッティードラゴン Lv108。
討伐：巨人族 アサルトギガント Lv102。
討伐：魔族 グレーターーデーモン Lv115。

・ · · · ·

「なんでレベル100越え限定なんスか!」

「罰ゲームだし?」

「死ぬから! これデスマゲームだから!」

「あつとにかくに田覚めるつて

「上限解除クエ受けてないから! レベルキャップ解放されてない
から!」

リーダーが罰ゲームとしてのクエストを選べるのほとんどかくして、選んでるリーダーのレベルが上限になるのはどうなんだよー。

「P-T組んだけばあ？」

「ねえせんー、俺にそんな社交性があると想つてー?」

「……面白こくへりこティーナと真逆なんだから」

いやほりトイーナやつは、向こうから寄つてくるか。ひ。

そんなバカをやつてると、ギルド会館の一階へ続く階段から、知つた顔がふたつ下りてきた。

「あー」

声を上げて、子虎が階段を飛びように下りてきた。
ついでに母虎も小走りにやってきた。

「よー」

間違いなく、あの時の二匹だ。

手を上げて挨拶すると、子虎が足にしがみつき、二へーっと俺を見上げてきた。

にへーっと笑い返してやると、がしがしとよじ登りだしてきた。
服が後ろに引っ張られ、のど元が襟で「ぐえつ」ってなるのを頑張つて耐えると、子虎は俺の頭にしがみつくよつに位置取つた。
肩車してやつていると、母虎も側に来た。
すこし近い……つてか、寄りすぎじゃね?

両手をお腹の辺りに含わせて、頬を染めて見上げてくる。
見つめてくる?
なんだこれ?

「昨日は、ありがとうございました」

「ギルドで保護してもらひましたの?」

「昔、祖父が、ギルド長と旅をしていたんです」

そういうつてかあ。

ギルド長の契約獣人だったつてことか。

話を聞いていくと、街に入るために必要な身分証として、ギルド長がゆかりのものに渡しているという、特別なメダルを持っていたらしく。

ところが、やっと街にたどり着いたと思ひて気を抜いたところ、そのまま立ち上がりなくなってしまい、意識も怪しくなってしまったところへ現れたのが俺だった。
というわけだ。

……なんでこんな、うつとうつと見上げてくれるんだ?

「ギルドの方だったんですね」

「まあな」

氣まずい。

だつて! 僕、ギルドに登録されてて、門を通れるなんて知らなかつたんだもん!

あの苦労、全部無駄だよ。

「本当に、わたしと一緒にでなくとも、門をくぐれたのこの？」

ん？

「宿を……つて、おっしゃつていたので、探したんですよ。」

ああ……宿場の方の家が使えちゃつたからなあ。

「そりゃ悪い」としたなあ

なんだろう、この人の俺を見る。すつげーそわそわするんだけど。

あれか？ 薬代の罪悪感を持たせないよう、嘘まで吐いて去つて行つた奇特なお方とか。
そういう流れか？

「あの、やつぱり、なにかお礼を

フクグクテクト？

「夫がいてくれたなら、薬代もお支払いできたのですが

ですよねー！

夫とか言われたよ、ちくしょいめー！

「ねえさん、こそこそせんぐだぞー

「まあ良いじやん。人助け。猫ダスケ。虎？」

「虎ツスね」

「んで、なにやつたの？ えりこの？」

「えりくない！ でも微Hロー。」

俺は大きっぽな感じで畠田のことを話した。
きやーっとねえさん。

「舌とかやつこーー。」

母虎が赤くなりながら補足する。

「すみません、つこ（く）（く）」

奥さん！？

「Hロイよ、この人妻ー、畠下がつー。」

「僕じやねーよー。」

「じゃあ夜討ち朝ぶっかけ？」

「夜通し頑張るとか耐久力あんなー！？」

「あなたスタミナは？」

「1024ですかー。」

「ヒロヒロビヤんー?」

話が進まねー。

「んで、母虎さん、昨日のあれ、ビーフिंဂだつたの?」

母虎さん、お毛毛の下の玉っペが赤くなつてゐるのを感じしてゐるか、肉球ハンドで顔を挟んでさすつてます。

いいなー、この人。

でも、話しひ出した内容は、ちょっとくすぐりでもなことじだつた。

「実は、わたしが縄張りとしてこた場所に、ゴブリンが出来るよつこなつたんです」

「ゴブリン? ど、ねえさんほ詐欺やつたはずねた。

「でも、虎種の敵じやないでしょ?」

「普通なり……でも、その中におかしなゴブリンが居て」

「どんな?」

「動物の骨を被つて、奇声を上げてるよつな……」

ねえさんほ、ゴブリンシャーマンか、と呟いた。

「んじや、あんたがやられたの、ゴブシヤの魔法ね

俺も少し考えた。

「その略し方はないかと」

「んじゃ『ゴブーマン』?」

「なんか別のものになつた!?」

しかもカッケー!?

「虎種は力は強いけど、ケダモノ系だから、魔法耐性が低いもんねえ……」

「んじゃ、病氣か疫病の魔法にやられたんスかね?」

「単純に、混乱とか弱体かも知れないけどね。それで体長崩して病気になつたとか」

「母虎さんの旦那さんは?」

母虎さんは頭を横に振つた。

「あの人は」

「そつか……」

「他の子たちのところへ

「……ん?」

「わたしは、捨てられたんです」

なんだよ！？

「ううう」と、ねえさんが説明してくれた。

「虎種つてか虎は、旦那さんのテリトリーの中に、複数の奥さんがテリトリーを持つてんの」

「なん……だと？」

「人の来ないような森の中で、ハーレム作つて暮らしてんのよ」

ねえさん、
事件です。

つまり、その野郎は、母虎さんを置いて？

はい……と、彼女は寂しげに笑う。

「わたしとこの子を守るために傷ついて、他の子たちを守ることができるなくなつたのでは、世話をありませんから……」

俺的には許せん話だ。

「ハーレム作るんなら、全員守つて見せろっつの！ それが男の甲斐性だ！」

「一人も困えてない奴が言うと、寒いを通り越して痛いわー」

「泣くよー? 本気で泣くからねー?」

「あの……お独りなんですか？」

「 「え？」」

「え！ いえ、あの

きょろきょろと辺りを見たあとで、思い切ったよつこ、くつと顔を上げた。

「わたしを、雇つてもうえませんか？」

俺は、ねえさんに田配せをした。
ねえさんも、あれ？ ってな感じだった。

「母虎さん、戦えんの？」

「あー いえ、それは……」

だよなあ。

戦闘用のマコとして仲間にできる虎種は雄だけのはずだし。

「でも、身の回りのお世話をうながす

あー、そういうことね。

つい、ゲーム的な意味での雇つ=戦闘要員つて解釈しちゃったわ。

でも、その勘違いを抜きにしても、ねえさんは、できないでしょ、
つと冷たかった。

「虎種つて、必要がなかつたら素つ裸の四つ足で走り回つて狩りをして暮らしてゐるじゃない？ 人の世話とかできるの？」

「それは……」

「それに、こいつに助けてもらひたとき、正体を隠してたの、奴隸狩りに見つからないようにしてたんじゃないの？」

しゅんとされると……萌えるなあ。
とか、うずうずしてしまう。

しかし現実問題としては、確かに家政婦としては難しい。
人間の世話ができるか、どうとかってだけじゃなくて、この聞の
話もある。

口の臭かった件だ。

虎種は、火を恐れたりはしないけど、使うかっていうと、使わな
い。

体が資本の、野性的な種族なんだ。
歯を磨く、湯や水で体を洗う、そういうことをえしない。
ねえさんの言うとおり、けだもののように暮らしてる。

それでも、そりですよね、と、しゅんとしているところを見ちゃ
うと、なあ。

「ギルドマスターは、なんて言つてるんだ？」

「誰か、知り合いのいい人を、探していくだと

「ギルドマスターが庇ってくれるんじゃないの？」

「虎種は、色々な方に、狙われますので……」の子も居ますし

ギルドマスターには迷惑をかけたくないけど、俺なら良いつてこ

となんだろうか？

なんか違うっぽいと首を捻つていたら、ねえさんが教えてくれた。

「宿場町の家、防犯機能があるでしょ」

あれか！

許可してゐるプレイヤー以外は出入りできなくなる奴。

「あれ、NPCにも効果あるんですかね？」

「あるんじゃない？ 契約モブとか連れて入ることができるんだか

「ひ

なるほど。

後頭部に張り付いてる子虎をゆりゆり揺りじて考える。

なんか、俺の頭にお腹貼り付けて、額のあたりに顎を落として、
むふーっとか言つてる。

気持ちよさそうだな。

母虎さんは、なにかを期待して、ちらちらといつちを見ている。
同じ誰かに預けられるなら、信頼できる人の方が良い、つてこと
なんだろうな。

「でも、ディーナがなあ……」

「それよりも、旦那さんの方じゃない？」

「へ？」

「もし奥さんが、他の雄んと」「行くみづな」ことになつたら、取り
戻しにくるんじゃないかなあ」

「いやいやいや！ 虎種と修羅場とか、シャレになんないですよー！」

「まあそれがなくっても、旦那さんがどうなったのかは、調べるべきだろ？」「

ちょうどど、つと、ねえさんは、討伐依頼を一つ選択した。
そのフィールド情報を母虎に見せる。

「うー、あなたの根城だった森？」

「はい」

待つて！

ねえさん、その顔はヤバス！
ひつじょーに良い顔でした。
黒い意味で！

ねえさんは、館内全域に響くような大声でシャウトした。

「けつてーー！ 罰ゲームはゴブ退治ーー！」

「うええーー？」

「んでもって旦那と決闘！」「

「ないつ、それはないからー！」

母虎さんが顔をのぞき込んできた。

「頑張つてくださいー！」

むんつて。

なんで両拳を脇にひいて応援なんですか！？

「いやいやいや、田那さんと、よりを戻していくださこよー。」

「人は過去に囚われていては前に進めませんー。」

「虎ですかねー！？」

「雨季が繁殖期です！」

「家政婦とかつて話でしたよねえー！？」

「こまならその子も付いてますー。」

「付けんなあー！」

とりあえず、第一にゴブリン退治、一番田に田那捜索。二番田に
……交渉と言つことになりました。

子連れ寝取りで親子どんぶりとかねーよ。
どんだけ上級者なんだ、俺は。

「頑張れDT」

「俺、生きて帰れたら、非DTになるんだあ……」

逃亡したいの意味だから、フラグの建て方は間違つてないと思いま
す（ＴＴ）

クソゲーってやたら設定が凝つてると、直感的には遊べないシステムを取つて

転移呪符発動。

魔法陣の外から、ねえさんが。

「一つ言つておきたいことがあるの」

「なんスか?」

「帰つてきたあんたを待つてるのは、子連れ寝取りで親子どんぶりだけじゃない……獣姦もよ!」

テレポートが終了する前にスローライニングナイフを振りかぶったんだが、投げ終わつた時には転移がおわつっていた。

「やしい! ササガネえさん! 獣姦とかねえよ!」

「初めてがモブニコとか悲しそぎるじゃないですか。そうでしょう、ねえさん……」

せめて人間がいいです。

可愛い子なんて贅沢は言いません。
だってこのままだと、最初すらなさそんなんだもん。
始まることすらないかもしけない。
いかん、泣けてきた。

ところで、ここは母虎さんが住んでいたといつ森の中である。
母虎さんの縄張りはもつと奥の方らしいから、ここからさらに西移

動となる。

ギガンティアスの西方に位置する森だ。名前があるほど立派でもないが、直進するよりも迂回した方が、向こう側に抜けるのは速い。それくらいには深くて危険。

俺の背後には、ギルドが置いている要石があつた。
使用した呪符の転移田標となつている石^{マーカー}だ。

転移符は、ギルドから受け取ることができる。
クエストをクリアするともらえるポイントと交換だ。

特別な場所への転移符になると、イベントでの配布やクエストでの報酬として配られることになるんだが、この森は特別なフィールドというわけでもないんで、呪符の入手はくり返し可能だ。

「んじゃま、行きますかつと」

あ、すんません、どもどもと、腰を低くして通り過ぎようとした
といひ。

「いふ―――――。」

「フーリンビもが騒ぎ始めた。

「転移先は安全地帯のはずだろー？ なんで『フーリンが！』

それも何十匹もつて！
んでもって俺は、そのど真ん中に！

あ、やつを投げたナイフが、眉間にスコノヒ刺さつてる「アブ」がいる。
よく生きてんな、あいつ。

「アブ」は、低レベル冒険者向けのフィールドから、高レベルプレイヤーが挑戦するダンジョンにいたるまで、どんなレベル帯のエリアにも出現していく小型亜人のモンスターだ。

それだけに、ザコキャラだから、と油断するようなわけにはいかない。

弱いのも居れば、強いのも居る。
油断するわけにはいかない……んだが。

「「アーッ、ぶつぶつぶつぶつぶー（ふーっせっせっせー）」
か、ワガ群くんはー。」

「「アーッ、ぶーっ、アーッ、ぶつぶつぶー（左戦力薄いぞ！　なにやってんのー。）」
「「アーッ、ぶつぶつぶつぶー、ぶつぶつぶつぶー（ロシングソードなど、当たらなければ死つといつ」とはなこー。）」

「「アーッ――――――――（やつだ、おそれるな、みんなのために
一。）」

……なんかウゼム！

キャラ的に負けてる氣がある、なに言つてゐかわかないんだけ
ビー。

そして俺の前に立ちはだかる一匹の「アブ」。

「「アーッ、やあ、殺し合おう……化け物ー。」

イラシ

なんか、がっしゃがっしゃに鎧を着込んだゴブリンがショートソードをかっこよく突きつけってきたんです。

「なんなのこの状況ーー？」

「アリのヒキーノー.」

「誰がだー！」

「すまんー。トレインしちまつた！ 助けてくれー！」

ゴブリンのような集団種族は、一匹戦い始めると、集つよつこ寄つてくる。

このため、下手な場所で戦うと、あつとこう間に囲まれちまつ。そういう状況で逃げ回ると、まるで電車じつじのよつて後に続いて追つてくる。

増えながら。さながら連鎖するかのように。この状態が、トレインだ。

「あんた誰だー！」

「ザ・プラクティスのメンバーだー！」

見た目20代？

弓と細身の剣に、簡易鎧。レンジャーっぽい。

データナとしての記憶を掘り起してみてるんだけど……。

「んな奴、いたかなあ？」

「ティーナは？」

「お前、ティーナの知り合いかー？」

「あこつまどじーだ」

「奥だ！ 僕は戦闘中に絡んできたゴブを弓を離れて引いて……」

「うそなとこりまで引っ張つてきてんじゃねえよ…… MPKかよ」

MPKは、モンスターを使つてプレイヤーを間接的に殺つちゃう悪質なプレイです。

直接やると違つて、業カルマを上げなくとも済むので、非常にお得ですが、みなさんは真似しないでね！

「にしても必死だな、こいつ。

「俺は死ねない、死ぬわけにはいかないんだ！」

かつてここと並んでるナビゲーター。

巻き込まれて死亡」とか、間抜け死んでなことかしね。

「とおつー。」

なげなしの魔力で閃光魔法を破裂させる。
一瞬遅れて、マクロ起動。

「 蒸着！」

ゴブリンたちが田を開いたとき、そこにはかつてない鎧騎士が誕生していった。

彼らが再び田を開いたとき、そこにはかつてない鎧騎士が誕生していった。

俺である。

「 説明しよう。荷物持ちフラグは、マクロを使うことによって、わずか一ミリ秒で武装を変更できるのだ。」

「いやそれ普通だから。」

「 どうしてマクロによる装備変更を知っているのか、ここにアレ む？ マクロによる装備変更を知っていることは、ここにアレ イヤーか。」

マクロによって、変更された装備は以下の通り。

頭：竜の顎。

胴：竜の胸骨。

腕：竜の爪。

武器：竜の牙。

竜と名の付く防具は、本当は他にもあって、シリーズとなるんだけど、他の部位は、使わないと思って、宿に放り込んだままにしている。

顎は竜を象った兜。開いた口から、俺の顔が覗けてる。

胸骨は、背中から脇を通って、胸と脇腹をくわえ込んでいる鎧だ。

爪は肘から爪のよつて伸びている部位のある、手つ甲と盾が一体となつたもの。

牙はまんまだ。竜の牙から削り出した剣。
ロシゲソード

竜の骨つてのは、単純なカルシウムではできていない。
でなければ、あの体躯を維持はできない。

竜は、生まれたときはカルシウム製の骨であるのだが、体が大きくなるにつれて、魔力による補助と強化を行い始める。

そうして、骨には強く、竜の魔力がしみこむのだ。

その身の内で魔力に漬け込まれ続け、魔力が物質化し、固化し、カルシウムに変わつて骨そのものとなるまでに至つた凝縮体。

そりや強かるうて。

よつて、その骨から作り出されたこのシリーズは、强度 物理的な攻撃に対する防御力だけなら、ゲーム中最強と言われていた。そして攻撃力に対するブーストも半端ない。

牙がそうだ。牙の剣は、物体の分子結合を破壊するかのような崩壊現象を、対象に与える能力を持つ。

竜の牙にかみ砕かれるように、竜の骨で作られた武器の前には、どんな盾も鎧も紙のように引き裂かれる。

ただし、今の状態では不完全だ。

竜のシリーズは、全部を着ることによつて、初めて竜の加護を発動させる。

竜が生まれながらに持つてゐる防御結界を発動するんだ。
つまり、今の状態じゃ、攻撃特化も良いところ。

まあ装備品としてはわりとレアだし、驚いてもらつて良いんだけ
ど……。

「待てー?」

「え?」

「マクロだつて?」

「へ？」

「なんでお前、マクロが使えるんだよーーー？」

……どうにつけど？

なんかこの人、違つといひに引つかかつたみたい。

でもま、今は気にすることじやない。

竜の武器が放つ剣呑なオーラに、ゴブリンたちが後ずさる。

「確かに俺は、荷物持ちだけどな」

半身に構え、武器の柄は頭の横に。

刃は敵へと水平に。

両手で支持する。

「荷物番つてのは、普通じやないものを、いっぽい持つてるんだぜ
？」

俺は牙を振り上げ、降ろした。
気合いと共に。

「ドラグーン・ブレイカー！」

厨二病っぽい雄叫びと、竜シリーズの放つオーラに、ゴブたちが
びくりを身をすくめて……まぶたを閉じた。

うん、天丼は基本です。くり返しさくべー。

彼らが再び田を開いたとき、その時が……せつと彼が死ぬときだ！

「 独りで逃げんなあー！？」

さうば、友よ、君のことは忘れない。

いやちゃんと『BOT 妖精／回復の君』を残してきたから。

あの程度の被ダメなら、妖精が消える前になんとかなるだい。

ちなみに、BOTってのは、自動プログラムね。つまり妖精さんが自動で回復魔法かけてくれるってこと。

IJの系統のBOTは、大抵のMMORPGで、外部プログラムとして開発され、公式からは違法、違反として取り締まられる系統のものだけど、多くで必要とされると言つことは、需要があると言つことだ。

というわけで、運営さんが作ってくれた公式妖精さんです。

見た目、十一・三才くらいの少女で、手足の細い未発達な姿をしており、背中に四枚の羽が生えてくる。大きさは手のひらにお尻が乗るくらい。

そんのがふわふわと田の前に浮いて、こいつと笑つて癒やしをくれるんだ……。

おかげで、三角座りでじつと眺めて癒されるお兄ちゃんたちが続出し、一時期口リ問題による社会バッシングを受けました。

YES！ ロワーダ！ NO！ タッチ！

ドラゴンレジョンなど多くのヘンタイ紳士によつてプレイされるVRMMORPG……でした。

あえて目標を設定するなり、上り坂ばかりでしかね。

森の中を駆ける。敵は見えない。

竜の武具を取り出した理由の一つがこれ。接敵回避だ。
特定レベル以下のモンスターとの、ヒンカウントがなくなるやつ
ね。

もつとも、完全回避ではない。シリーズの装備数で確率
は変動する。

竜と名の付く武具は、どのシリーズにも同じ効果が付いている。
装備すると、竜の気配をまとっているということになるんだ。そ
れは数が多いほど、気配が強くなると言う扱いになる。
よつて非力なモンスターは、自分から逃亡する……という設定だ。

地面には、大勢のゴブリンが、かけっこをして踏み荒らした跡が
残されていた。
今はそれをたどり、走っている。

ちらりと肩越しに後ろを見る。

背の低い木の枝が重なつていて、要石の広場はもつ見えない。
俺は違和感を覚えていた。

それは置き去りにしてきた男のことだ。

あいつは、ディーナと同じギルドのメンバーだといつ。
この場合のギルドってのは、気心の知れたもの同士で、身内的に
つるんでる連中のことだ。
仕事を紹介してくれるギルドとは、また別ものだ。

で、あいつは、すくなくとも、ディーナと一緒にクエストをこな
森の中を駆ける。敵は見えない。

しに来ていたみたいだつた。
そして、戦闘もやつていた。

おかしくないか？

ディーナのレベルは150だ。

間違つても、ゴブリンにダメージを食らうようなことはない。
強いゴブリンはもちろん居るけど、ゴブリンの最大レベルは70
で、つまり、俺と同じ程度なんだ。

そんなディーナとパーティを組んで、クエストをこなそうって奴
が、あの程度の数のゴブリンで泣きを入れるつて……どういうこと
だ？

レベル150と70の間には、越えられない壁がある。

具体的には90くらい？

つまり、二回目のレベルキップの解放あたりだ。

レベル90以上のキャラに対して、レベル70以下のキャラは、
クリティカルが発生したとしても、1以上のダメージを与えること
はできなくなるんだ。

鬪気とか魔力障壁とか、いろいろ後付け設定が出されていたけど、
ほんとのところはシステム上の問題だ。

ダメージ計算上、そうなつてしまふだけの話である。

最大レベルが70であつたころには、考えられていなかつた問題
だつた。

それからもうひとつ。

ディーナが今受けているクエストだ。
いつたいどんなクエストなんだ？

カンスト組のディーナが、パーティを組んで受けなきゃならない
クエストってなんだ？

難易度が見えないんだが……。

そんなクエストが、今、この森で発生してる？
虎種が、ゴブリン相手に、きつこことなつてるらしい、この森
で？

いや、ゴブリンのクエストがメインなのか？

そのクエストの演出の一いつとして、虎種が巻き込まれてる？

わからん……。

巻き込まれたくないんだが……ディーナの方を探つてからにする
べきだらうか？

わからんと言えば……。

わからんと言えば、マクロのことをもあつたな……。

もしかして、ステータス画面とか、あれ、俺だけなのか?
ログウインドウとか……あれも、謎つて言えば謎だしな。
いったいどんな仕様で、周囲の会話を文章変換して、ログとして
記録してるんだって話だよな。

俺自身に、そういうスキルがパッシブで備わってるんだろうか？

んで、本題のマクロだ。

マクロつのは、いわばプログラムだ。

書式に沿つて行動、対象、経過、結果などを記述し、ワンクリック
で実行する……というものだ。

たとえば、『装備・主武器・ロングソード』とする。

このマクロを実行すると、自動的に利き手にロングソードが出現するわけだ。

他に、『装備・胴・鉄の鎧』でも良い。

俺は走りながら、ガチャガチャと音を立てる鎧について考えた。

一ミリ秒？

確かにおかしい。

実際には、もう少しあととかかってた。けど、一秒未満だったのは間違いない。

こんなものが、どうからだいやつで、一瞬で出て来たっていうんだろうか？

それについては、もう既にしないでおくとしても、一秒に満たない間に、装備が解除され、持ち運び袋の中にしまわれ、別の鎧が出現し、俺の体に装着される。

どういつ理屈が働いてるんだ？

着るとか脱ぐとかって問題じゃないよな。

本当に鎧を着ようとすれば、身につけるのに相当の時間と労力を必要とする。

特にこんな、ゲーム仕様の「デザイン品なんて、どうやって組み上げられていて、どうすれば体に装着できるのか、想像もできない。たぶん、労力とか以前に、不可能なんじゃないだろうか？」

仮に着始めたとしても、運動できるような形で、体に固定できることは思えないんだが……。

「やっぱ、ゲームの中なか？」

しかもウインドウとかの特典仕様^{チート}？
もしかして、俺、主人公属性ついてるの？
マジデ？

じゃあ魔王とか居て、倒すまで終わんないの？
……とか、つい首を捻つてしまつ。

「ん～～～」

だけど、鎧がこすれることによつて付いた草の汁の臭いや……。
踏みつけるたびにそれなりに沈む、堆積した腐葉土の感触はあまりにもリアルで……。

「どうも良くわからんのだよなあ……」

走りながら、俺は自分の頭をかきむしりたくなつていた。
俺、こんなに頭の回転、鈍かつたかなあ？
あ……と、俺は嫌なことを考えついた。
まさか、フラグのINTに影響されてんのか？

青くなる。

次、レベル上がつたら、ちょっとポイントの振り分け考えて見よう。

そう思つた。
その時だつた。

ガアアアアアア！

獣声が、轟いてきた。

一斉に、森の鳥が逃げるために羽ばたいた。

小動物も逃げていく。

すねに何かがぶつかる感触。見下ろせば足をネズミが踏んづけて
いった。

あまりのことに、俺は足を止めてしまっていた。
はっとして、俺は再び駆け出した。

茂みを抜けて、先へ進む。

やがて聞こえてきたのは、「はあ！」とか、「やあ！」とか、
「どうだ！」とか、勇ましい戦いの声と、それに向かい合っている、
獣の吠える声だった。

「ちえーんじ、アサシンモード、すいっちゃん」

スピードを落とし、装備を換装する。

布生地をメインにした、音のしないものばかりを選んで着込む。
色は黒だ。さらに顔も頭巾で隠す。

あげく、レアアイテム、姿隠しの外套を取り出して、身に纏う。
効果発動、終了まで3分。

こつそりと隠れて、戦いの場をのぞき込む。

そこではティーナと、その仲間たち……総勢五人が、雄の虎種と
戦っていた。

あんまり深い裏設定を作っちゃうと説明文が長くなるから嫌なんだけど、厨二設

なんだ、あれ？

俺には理解できなかつた。

虎種というのは、モンスターではない。亜人の一種で、プレイヤーを助けるNPCだ。

体躯は人よりも大きいが、かけ離れていると言うほどでもないはずだ。

なのに、その虎種は、一メートル半をゆうに越え、三メートルに迫ろうかという、大型だった。

上半身が大きすぎて重いのか、やや前のめりに背を曲げている。両手は人の頭よりも大きく、血にぬめつていた。

足はずつしりと大股に大地を踏みしめ、かかとを上げている。

まずい……嫌な予感に襲われた。

虎種は体重を前に傾け、その倒れる勢いを足して、前に出た。

一步目で最速に、二歩目では腕を振り上げ、三歩目で腕を振り切つていた。

ディーナの仲間らしき男の上半身が吹っ飛んだ。

魔法付きの武具らしい白い鎧は、胸から腹に掛けて引き裂かれていた。

胴体が宙を舞う。内腑がこぼれ、繫がつてゐる腸が下半身を引き

ずり倒した。

「ダッ...?」

誰かが叫んだ。

バウンドした上半身は、隠れていた俺の田の前に転がった。首がころと、力なくおかしな具合に曲がり落ちた。

極限まで開かれたまぶた。田は半分だけ白田を剥き、瞳孔の開きわった黒田が、上まぶたのふちから三分の一だけ見えていた。

俺は、震えて、動けなくなつた。

(なんだ、よ..... しれ)

血の臭いに、ぐつとむせて、口を押される。

(死んだ?)

田の前にあるのは死体だつた。

(死体、だ)

わかりきつてゐるのに、思い返して確認してしまつた。

千切れた胴体と下半身。血がだらだらと溢れだし、土を黒く染めしていく。

半端にこぼれた内臓はまだピンク色だつたけど、森の枯れ葉と土にまみれて汚れていた。

それは、これ以上となく、死体だった。
消えもしない。

ゲームのよつこ、ぼかされてもない。

プレイヤーを助けるためのNPCが、プレイヤーを一撃で死亡させた。

一撃死なんて、そうそつあるもんじやない。
思わず、ログウインドウを開いてしまった。

(ダメージ、3000!?)

魔法でもない物理攻撃で、レベル150でも耐えられないようなダメージが発生しているなんて、異常すぎる。

グルルと唸り、獣が次の得物を見定める。

そこには白いローブ姿の、おそれらしくは回復役の女が居た。

「ちよっとー、ひつち来るー、誰か引きつけよー。」

「無茶言つな！ 盾役が一撃だぞ！？ 支援魔法が先だろー！？

「イベントシーンの直後に問答無用つて酷くない！？

回復役の女、軽装備の戦士の男、重装備の男、……これは騎士タイプか？

「くつそ、立て直せねえ！？」

それから死んだ男に、ディーナ。

ディーナは、一角獣の鎧と呼ばれる、純白の重装甲を身に纏つて

いた。

その顔は酷い色をしていた。仲間の死にショックを受けているようだつた。

「だから先に支援魔法かけておこうって……」

「うっせえ！」

ディーナはびっくりと体をすぐめた。

そして、首をすくめたまま、でも……と相手の様子をうかがつていた。

そこに俺は違和感を感じた。

なんだかなにかおかしな雰囲気だった。

ハブられてるような空氣があった。

ディーナも、みんなの顔色をうかがっている。
怖がつていてる？

俺は……ディーナは、こんな風に扱われるようなキャラじやない。
人のために前に出て、みんなとじやれ合い、弾けるような……。
そういうキャラを演じてた。

それに、だ。

俺は、いま居るディーナ以外の面子について、覚えがなかつた。

(俺の知らないメンバーだと?)

いぶかしく思つてゐる内に、ディーナがくつと、顔を上げた。

決意をかためた顔をしてゐた。

「あたしが！」

オーロラの輝きがこぼれる直刀を手に、駆け出した。

横合いから虎種へと斬りつける。

跳ねるように飛んで、両手でもつての一撃だったが、勢いと体重の乗つっていたそれも、虎種に簡単に受けとめられてしまった。

右腕を持ち上げただけ。一の腕で、だ。

虎種の獸毛は、下手な武具よりも硬いとされている。にしても、これは……。

(ダメージ、0つて……)

レベル150のティーナが、勇者装備と言われる天剣を使って、ダメージを通せないなんて……。

種族特性の物理、魔法防御壁無効化。魔法による耐性防御無効化。天剣にはそんな能力があるのに……。

(あの虎種、特性じゃなくて、素の防御力が、反則級なのかよ……)

虎種は、隣に降り立ち進退窮まっているティーナを見下ろした。

「あ、あ……」

ティーナの顔が絶望に染まる。

かかとが無意識に下がろうとしていた。

だが虎種は、ふいと、その存在を無視して、回復役へと向き直った。

た。

そして口にする。

「警告する」

「く……？」

「使用されているコーナーIROは、本運営によって正規に発効されたものではない。ただちに退去せよ」

「は……？」

「警笛を拒否と判断する。規約に基づき、強制排除する」

「ちよ、ちよっとー 規約つてなによー?」

虎種は女の真正面に立つて、その大きな体で彼女の上に影を落とした。

「ひつー?」

俺の視界からは虎種の背中しか見えない。

その向こうで……ぶしゅりと赤い血が弾けた。

その光景に、ザ・プラクティスの面子は、引きつりながら後ずさつた。

「なんだよー? 獣王クエストのはずだろー?」

「運営の垢バンか！？」

あいつら、この状態でまだゲームだと思つてんのか？確かに、虎種の口にした内容はそうだけど……。

(つていうか、垢バン……アカウントの削除だつて？)

あの虎種が、運営……あればけど、それに相当する何者がが操作してりキャラクターなら、なにが起こつてゐるかは納得できる。

できる……けど。

(これは、やり過ぎだろ)

不正ログイン　金を払つてゲームを始めず、パスワードを解いて、無断で勝手にゲームをやつていた……といつことなんぢうけど。

俺たちは勝手に連れてこられたんだぞ？

俺は望んでた。でも、未だにゲームだと想つてゐる連中がどうだかはわからない……。

虎種は、あとの一人も逃がさないよつだ。

喉をグルルと唸らせながら振り返つた。

巨大な右手の毛が赤く染まり、血は爪から滴り落ちていた。

軽戦士が愚痴る。

「システムメニューもマクロも使えなくなつてゐし、対策入つたのか？」

待てよ？

その言葉に、ピンと来た。

俺は、システムメニューを呼び出した。
繋がつてくれと願いながら。

(ねえさん)

(なにー？)

繋がつた！

(急いでる、答えてくれ。システムメニュー、マクロ、やつこいつの、
使える？)

(使えなきゃ、チャットできないでしょー)

(だよな、ありがと)

おかしな奴みたいに思われたけど、よかつた、ねえさんもだ。
俺たちは、コーナーとして、ここにいるのかも知れない。

だけどアフリンに追われてた奴も含めて、不正にログインした奴
は、そういうの、使えないのかもしれない。

虎種……あるいは虎種の中の奴、もしくは虎種を動かしているA
Iは、単に不正ログインをしている偽コーナーを排除しているつも
り……なのかも知れないけどさ。

だけビ……と死体を見る。

(それが、これか?)

あいつらは、ゲームの世界に行つてみたいと、願つていたんだろうか?

街でP-Tを組んで、ここまで来ているのなら、それなりに時間を過ごしてゐるはずだ。

なのに、いまだにゲームの中だと思つてゐるような連中だ。
信じたくないから、田を背けてこられるのか。
信じられなくて、ゲームの枠から外れたくないのか。

「回復役がまつときとかー、ねーみー。」

「なんとかしろよ、ディーナー!」

「なんとかつて……」

「使えねえなつ、モブディはよー?」

俺の頭の中で、かちんと、なにかの音がした。

「ザ・プラクティスのディーナーつづーから、期待したのにー。」

「俺たちと一緒に、来てんのかつて、思ったのにー。」

「中身モブとかねーよー?」

(あいつらつー!?)

騎士と軽戦士の一人の口は、死を前にして、軽く、ゆるべなつたようだつた。

腰が引ける状態で、ガクガクと震えながら後ずさつている。

虎種 獣王とやらば、そんなふたりを、尊大に見下ろしていた。

軽蔑 瞢棄すべき存在。

汚らわしいとばかりに、敵意をあらわにしていた。

すんと、音を鳴らし、地を揺らして、足を踏み、前に出る。自分が先に狙われることになつたとわかつた軽戦士が、背中を向けてかけ出した。

「待つて！」

それを追いかけよつとする獣王の前に、ディーナが割り込んだ。

「あなたの相手は！」

じりじりと、獣王はディーナを見た。

「警告する。お前の行動は、当レジャーパークにおける運営活動の妨げとなつてゐる。アクターは指示に従い、ホームへと帰還せよ！」

わからない！ つとばかりに、ディーナは何度もかぶりを振つた、

両手に持つた剣をかまえ直し、ちやきりと独特的の音をさせる。

「お願い！ あなたはゴブリンシャーマンの魔法で、おかしくなつてるのよ！ 正気に戻つて！」

必死の説得。

だが獣王は、変わらずディーナを見下ろすだけだ。

彼女の手は、足も震えていて、その震動が切っ先にまで伝わっていた。

まじりに涙が浮かんでいた。

獣王は、生きているものとして、ディーナを見ていなかった。

まさに物を見るような目だった。

その足に、力を溜めるように、身を沈めていく。

俺は頭が真っ白になった。

死ぬ？ ディーナが？

獣王が、力を溜めていく。

ボロクズのよくなつた死体と、ディーナと、獣王と。

視線の先に、全てが一直線に並んでいて。

次の瞬間には、このボロクズの上に、同じ形の同じ死体が……ディーナが落ちて、男と同じよう、うつりな目を俺に向けるのかと思いつ。

「！」

俺はなにも考えず。

考えられずに、飛び出してしまっていた。

転移転生したからには主人公化してもらいたい

かちかちと歯が鳴っている。

ディーナは、死ぬと悟ったようだった。

「そのまま押さえてろー。」

「じゃあなー！」

ディーナを置き去りにして、一人が逃げる。

そんな……と、ディーナは、振り向きたい衝動を堪えていくようだった。

プレイヤーの一人は、ディーナのことなど氣にもしないで、駆けていく。

NPCだとでも思つているんだろうか？

プログラムだから、使い捨てにして殺しても問題ないと思つていいんだろうか？

捨て石にされたと、置き去りにされてしまったディーナの顔に、絶望の色が広がった。

気力の減少とともに、剣を支えることができなくなつて、切つ先が重く、下がつていく。

その姿は、計算なんかではなく……。
プログラム

心のある、存在だった。

虎種が動く。

殺意が巨大な影となつて、小柄なディーナを押し潰す。

「ディーナー！」

そんな未来絵図なんて見たくない！

俺は茂みから飛び出して、ディーナへと突進した。

「フラグ！？」

俺はディーナの体を抱きかかえ、すつ飛ぶように転がった。

抱きかかえたとき、ディーナの驚きが咳きとして聞こえたが、それどころじゃない。

ディーナと一緒に転がった後で、底うように背にしてひざ立ちになる。

獣王が来る！ つと、俺はナイフをかまえたんだが……。

「へ？」

獣王がいない。

獣王は、俺たちを無視して、大きく飛んでいた。

「げえー！」

「Jのち来たー！？」

まずは装備の重い騎士がつかまつた。

獣王の四体　一一百キロとか、二五キロとかあるんじゃないだろうか？

そんなものが、四足から落した。

騎士を背中から踏みつけ、踏みつぶす。

騎士は、足、膝、体と、かつくんと、こつけいに潰れていった。ぐちやうと踏みつぶした獣王は、今度は四つの足で大きく跳んだ。

「ひー、ひー！」

軽戦士が、後ろから迫るものに恐怖した。

獣王の前足が軽戦士を押し転がす。

「がつー！」

前足で、後ろ足で踏んづけて、獣王は勢いのままに、軽戦士を追い越した。

足を滑らせながら身を曲げて、振り返る。

「ひ、はー！」

うつぶせに倒れ伏すことになった軽戦士は、泥だらけになつた顔だけを上げた。

涙声だった。

ゆづくらと獣王は歩み寄り……。

獣王は右の前足を振り上げ、軽戦士の頭を碎いた。

血まみれの獣王が、緩慢に立ち上がる。

「不正ログインによる、未確認ユーザーの強制排除を執行」

そして獣王は、俺を見た。

「その臭い、マリアの子の臭いか」

「へ？」

なんだ？

唐突に獣王は、普通……当たり前のキャラクターに戻った。膨らんでいた毛皮が落ち着き、血走っていた目も、冷静さを取り戻していた。

「臭い？」

「お前からは、俺の子の臭いがする」

首の辺りからと言われ、俺は首筋を押さえ……。

「あつ！」

子虎を肩車してやつたことを想い出した。

「マリアは無事か

「あんたが……母虎さんの、田那か」

「お前の言つ母虎が誰かは知らない。だがその臭いをわせてくれる子の母親なら、そうだ」

「他の雌虎と子供を助けるために、母虎さんを見捨てたんだろ？」「なんといひでなにやつてんだよ……」

「テリトリーを守つていた」

「テリトリーって……」

俺は、転がっている三人を田にした。

「アブリンが荒らしてたんじゃないのかよ

「怪しいものは、狩る」

「俺は……」

「その臭い、警戒、興奮しているものが付ける臭いではない。お前は新しい群れのリーダーに選ばれた」

「群れ？」

「そうだ」

虎種は笑った。

それは決して友好的なものではなかった。
あざけるような、面白がっているような、面倒くさいものだった。

「俺の群れから女を取るとは、なかなかやる。だがな、許せるものではない。わかるだろ？~」

「わからねえよ！」

結局、戦闘は回避されそうになかった。

戦闘は次回から！

俺は混乱していた。

運営側の活動が終わって、ただのイベントキャラに戻った。
そんな感じだった。

だけど、そんなに簡単には、切り替えられない。

割り切れない。

「ディーナ」

「はっ、はひ！？ なに！？」

「お前のクエストを教えてくれ」

「……え？」

「早く！」

怒鳴ると、ディーナはびくんと体を震わせた。
怖いのか、びくついているが、関係ない。
教えると、無理矢理に迫った。

竜、狼……そして虎。

「」の三種は、三強と呼ばれる種族である。

その一角である、とある虎種の一族に危機が訪れていた。

この国の虎種の中には、ギルドマスターとも親しいグループが存在している。

ギルドマスターと契約していた虎種がいて、その家系が今まで繋がりを保っているからだ。

その虎種のテリトリーが、ゴブリンに犯されたっていうんだが……。

……俺が母虎さんと子虎さんを助けたから、起じたクエストだつてことらしい。

こんなクエスト、ゲームの中にはなかつたんだが……。

とにかくだ、虎種が危機に陥るような事態だからと、ギルドに登録されているメンバーの中で、最上であるディーナのチーム、ザ・ブラックティスが選抜されたが……あいにくと、ディーナには、他のメンバーを集めることができなかつたらしい。

そのメンバーというのが、俺には大きな問題に思えた。

急ぎであつたため、連絡を取ろうとしたんだが、あいにくと捕まえることができなかつたと言つんだが……俺が気にしたのは、その理由だつた。

もしかすると、俺と同じなのかも知れない。

もし、本当に、その連中が、なにかしらのクエストに出ているだけだつたのなら、問題はないんだけど、俺と同じ、元プレイヤーだつたら？

もしかすると、それどころではなくって、引きこもったり、拒絶してしまったりしているのかもしねえ。

ともかく、そんなディーナに話しかけてきたのが、あの連中だった……ということだ。

……即席メンバーだったのか……道理で知らない連中だったわけだ。

あいつらは、不正にログインしていたプレイヤーだった。だから直接、ギルドで仕事を負うことができず、困っていたディーナに目をつけたんだろう。

不正ログインは、普通にプレイしている程度では、見つかる頻度は低かつたりする。それこそ一個のサーバーに、常時三千人前後がログインしているし、運営だって、枯れたゲームに、そこまでちゃんとした監視の手を入れているわけじゃない。

それでもだ、クエストなどのイベントとなると、話は別だ。クエストを受ける際に、キャラクターの正規情報がチェックされる。^{ユーザーアイD}

クエストの一部は、課金によってオープンになるものがある。初期クエストや、無料の追加クエストは、タダとして処理される。この課金チェックが、クエストの発生するキーキャラに話しかけた際に、行われるんだ。

そして、コンテンツが解放される。

プログラムを改編して、クエストをオープンにすると、NPCの会話内容など、つじつまの合わない部分が大量に発生してしまう。

それをクリアしたとしても、アップデートの度に、プログラムは細かく変更されてしまうので、まったく労力に見合わない。だから、この方法を取っている人間はかなり少ない。

それに、だ……もつと簡単な方法があつたりする。
それが、連中の取つた方法だった。

後から、クエストを受けたパーティに加入する。それだけで良いのだ。

この方法でなら、イベントは見られないが、課金の必要はなくなるし、特典は受けられる。

特典を受けるのが、依頼を受けた、^{リーダー}ディーナだからだ。

特典は、彼女からの分配を願えれば良い。

その方法でなら、ただのトレードだ。チェックされることなく、レアアイテムを手に入れられる。

もちろん、エクレアアイテム……エクセレント・レアアイテムは、譲渡不可だ。

こればかりは諦めるしかない。クエストを受けた人間だけが受け取れ、手伝った人間には渡らない。

そのため、普通、6人パーティなら、6回、同じクエストをこなすことになる。

全員が、手に入れたいわけだからな。

だけど、不正にログインして、ゲームをやつてる連中は、あんまりそういうのに、こだわりはない。

もともと、アイテムだけが目的なのが、多いからだ。

その理由は、^{リアル・マネー・トランザクション}RMTだ。

アイテムの現金化。

そのためだけのクエスト制覇。

どこのMMORPGでだって、あることだ。

ただ……普通、イベントシーンは、コントローラーが解放されない
と、プログラムが追加適用されないので、見られないはずなんだけ
ど……。

(そこは、現実だから……つてことか)

それにしたって……と、俺はこの惨状に眉をしかめた。

普通は、クエストを請け負う時に行われるはずのチェックを、イ
ベントで出て来るボスに行わせたのか？

そりや、クエストをこなしていくことが、ゲームの主な目的なん
だし、必ず通るといらんだから、仕掛ける場所としては正しいん
だろうけど……。

だからって、ここには、強いとかなんとかって話じゃないだろ。

「勝てる気がしない……」

「フラグ……」

ディーナが不安げに身を寄せてくれる。
背中を小さな手がぎゅっと握つてくれる。
すがるよつに体重を預けて引っ張り下げる。
俺は、肩越しに田をやつた。

長いまつげ、潤んだ瞳、桜色の小さな頬。

鎧を着込んでこないとこの上、どんな森の中だとこの上、少女を感じられる柔らかさと体臭を感じられない。

可憐だ……と思つ。

かわなれやと感つておひ。

……自演なんですねー！

「あくしょっぴー！ なんだこむなじせはーー！」

俺がやつてたことを、素の行動としてパパッてんだひつか？
せめて演技でないと想いたい（ ）、（ ）、

それでも、まあ。

「まかせひ

俺は、ぽんつと彼女の頭に手を置いて、獣王の前に立ちふさが
った。

本当の意味で、このディーナが俺が演つてたディーナと同じなの
かどうかはわからぬ、けど。

「俺の『ディーナ』に、手え出すんじやねえよ

育ってきた俺こは、俺の『ディーナ』にしか見えなかつた。

長くなつたので一分割（1）

獣王の口の端がつり上がる。

覗いた牙は、意外なほどに白かった。

（救いがあるとしたら、さつきまでの「レストロイモード」じゃないことだな）

恐怖心を、あおりれたりはしなかつた。

ただ、表情を変えただけだと、わかつたからだ。

（笑つてやがる）

負けじと、俺も笑つてやつた。

……俺、いま、イケてる？
光ってる？

正直、足がガクブルだ。

さつまのは、狂獣化とでも言つんだろうか？

体毛が膨らむと、毛の質でも変わるものか？
絶対防御とか反則過ぎんだろ。
だけど、いまはそ「うじやない。
被ダメージないつてんなら、勝算はあつた。

ZPCとしての、虎種のレベルは、100あたりが上限であ

ると推察できる。

「これは獣王でも変わらなければすだ。いや、上限に達しているから、獣王なのか？」

公式の設定通りなら、プレイヤーと行動を共にしてくれるNPCのレベルは、最大でもプレイヤーの三分の一、つまり100あたりが上限であるはずなんだ。

「…………レベルが100程度ってなんら、なんとかならない相手じゃない。」

絶対防御さえ、かわしてやれば、なんとか届く。

普通にせつたら、レベル70の俺の攻撃は、獣王には通じない。

だけど、なんにだって、抜け道はある。

ねえさんが、俺に罰ゲームとして、高レベルモンスターの討伐をやらせようとしていたのも、だからこそだ。

やつてやれないことはない。

無茶ではあっても、無理ではない。

だから罰ゲームとして成立するんだ。

ディーナが心配している。気配でわかつた。

無理だと……無茶だと、手伝おうとしてくれているのかもしれない。

だけの一 度、心が折れた以上、すぐ立ち上がる」ことは無理だろ
う。

(やつてやるや)

獣王へと宣誓する。

「小細工をせてもいいや?」

「その程度で覆せるものなら、やつてみるが良い」

「んじゃ、遠慮なく、な」

俺は、『アーリン』の時に使った竜装備へと、チーンジした。

虎種の一撃は脅威だ。紙装甲じや話にならない。

獣王の攻撃は前足……手じゃねえだろ、あれはもつー。
その一撃は、問答無用で、半端ない。
例え鎧が耐えられたとしても、中身の方が耐えられない。
上半身と下半身が千切れた男の姿がそれだった。
鎧が上半身ごと吹っ飛ばされた結果だった。
鎧は耐えたが、腰といつ関節部分は耐えられなかつた。
だから、もげたんだ。

俺には、こんな重装甲で、動き回れる力があるわけじゃない。

ならこの重装備は、動きが鈍くなるだけ損だつた。
しかし、それでも着ないわけにはいかないんだ。
膝の震えを止めるためには、しかたのないことだつた。

竜虎といつ言葉がある。

それは明示されてはいない、だけど信じられているという、おかしな具合に広まっている話だった。

竜と虎は相対している。

そして竜虎との言葉通り、竜と虎の咆吼は同等で、だからこの二種の力は、拮抗、または相殺されるような形になつてゐるんじゃなかつていうものだつた。

だから、竜に対しては虎の、虎に対しては竜の装備品を身につけていると、恐慌状態のよつな、ステータス異常を食らいにくくなる、と口にされていた。

これについては、確實な話じゃない。そうじゃないかと噂されている程度のことだ。

公式は認めていないし、そんな隠しパラメーターがあるのかどうか、確かめられたという話もない。

そもそも話の出所は、掲示板での書き込みだつた。

竜と戦う際に、虎の装備を付けていた者や、逆に、虎と戦うときには、竜装備を身につけていた者が、ステータス異常を食らいにくかつた気がする……って報告したんだ。

俺も俺もと、賛同するプレイヤーの数が結構あつたことから、半ば常識、定説として広められていた。

正直、これからすることを考えると、気休め程度でも助けは欲しい。

それから、武器。

竜の牙は使わない。

ショートソードだ。

それも一本。

二刀流のスキルは、かなり珍しい部類に入る。

なんとかって、面倒だからだ、育てるのが。

スキルには、右利きと左利き、両方のスキルが設定されている。

このスキル値が高いほど、プログラムが高いクオリティで、動作の補正を行ってくれる。

現実にはなかなかできない、逆利きや、両利きを堪能させるために、作られたプログラムだった。

だけど、実際に育てるとなると、話が違つてくる。

このゲームが、ヴァーチャルリアリティであるからだ。

スキルは、実際に使つていないと、上がらない。

つまり、両利きを実現しようと思つと、本当に逆利きの訓練をしなければならないんだ。

もつとも、習得にかかる時間は、プログラムの補正が働く、ヴァーチャルの方が、リアルよりも圧倒的に早いんだけどな。

その上、練習のためには、訓練場での地味な特訓とか、格下相手とのつまらない戦いなんかを、長い時間でこなさなくちゃならなくなる。

あげく、両利きになつたからつて、攻撃の手が倍になるわけじゃない。

よくて1・3倍かなあ？

右で斬りつけ、左で斬りつける。その間には、姿勢制御、重心の移動などを行わなければならないんだ。

その上、武器を連続で振り回す都合上、振り回されたりしないよう、扱う武器は、自然と軽めのものになる。

つまり、最大攻撃力は、どうやつたつて、片手装備よりも落ちるんだ。

その上、それだけ派手に動くわけだから、スタミナの切れも早くなる。

どう考へても、お得じやない。

戦士系にとつては、お呼びじやない能力だ。

だつて、戦士系は、相手の防御力補正を、最大攻撃力で上回つて、いくらだつて商売だからな。

攻撃力を上げる」とは考へられても、落とすなんてありえない。

もっとも、盗賊系とか、軽装備を主体にしてるプレイヤーには、重宝される能力だけだ。

そして俺は、そんなスキルを身につけている。

ディーナに翻得させるか悩んで、練習台として、試していたから
だった。

「準備はできたか？」

獸王は、俺が決意を固めるまで、待ってくれていた。

「律儀にありがとよ」

「なあに、マリアの惚れた男だ。俺よりも良いとした男だ。その日の確かさを知りたいだけだ」

「？」

妙な物言いだなと思つたけど、尋ね返すほどのことでもなくて、俺たちは互いに一歩を踏み出した。

「 フラグ！」

「 良いね！」

命がけの男に叫ぶ少女の声！

そのフラグを回収してやるよー

長くなつたので一分割（2）

ドラゴンレジョンは、ただのゲームじゃない。
VRMMORPGだ。

それも、高スペックマシンを要求する、最低最悪最強の物理エンジンを搭載した、化け物ゲームだった。

「やるぞ人間！」

「フラグだ！ 獣王！」

俺たちは交差した。

体長三メートル……と書くと簡単だ。

しかし間近になると、とんでもない巨体だった。

縦に三メートル。

横に幾つだ？

見上げても、胸筋しか見えない。

巨体で視界が埋められている。

光も陰る。

影に包まれてしまう。

そしてブォンと、俺の頭よりも大きな手が、横なぎにふるわれる。

鎧のために、俺の動きは制限される。素早さが落ちている。

だから動きは最小限にどどめるしかない。

大きい、ということは、その手がふるわれる高さも、高い位置になるということだ。

だから、わずかに身をかがめて、ふるわれた右腕をかいぐつた。そして通り抜ける際に、横つ腹の毛皮に、逆立つように刃を沿わせた。

血が流れた。

あり得ない防御力の正体が獣毛にあるなら、その下に刃を届かせれば良い。

獣毛を逆ぞりすることで、その下にある肉にまで刃を至らせれば良い。

刃に付いた赤の印象は凄いものだけど、パラメーターで見れば、結局のところダメージは1だ。

位置を入れ替え、身を捻る。

素早く動けない。動きに合わせてスタミナがガリガリと減っていく。

筋力に合っていない鎧のせいだ。

スタミナ切れまで、あと何回避けられる?

互いに回転して、一撃目を放とうとする。

先に回り終えたのは、獣王だった。

右足を軸に、左足で地を蹴り、そのまま左腕を振るつてくる。

『左』に剣を持っていた俺を、豪腕が直撃した。

フラグという、ディーナの悲鳴。

だけど、その俺は吹っ飛ぶことなく、かき消すように滅した。

その三歩下がったところに、右に剣を持った俺が居る。

「ダニー 幻影か！」

「 汝の身は戦いを臆す！」

防御力低下の弱体魔法を放ち、さら下がる。

魔法耐性の低い虎種には効果観面（こうかてきめん）だ。

俺は魔法のエフェクトが収束する様を見ながら、空いた左手で、取り出したアイテムを地に撒いていた。

それは、大量の、クルミのようなものだった。

「しゃくなじ、獣王が前に出ようと踏み出した。

その足がクルミを踏む。

「 ！？」

光と爆発。

フラッシュグレネード

閃光爆弾に相当するアイテムだ。

威力は、使い手ではなく、『作ったプレイヤー』の能力に依存する。

俺に絡んで適用、修正される項目は、成功確率、弾けてくれるかどうかだけだ。

つまり。

「小體的你就是你就是你就是你就是你就是你。」

さりに逃げるよつて下がる俺。

獣王は一足を踏ん張り、胸を張り、両腕の拳を引いて、咆吼をあげる。

森の木々が震動する。

虎の足は血だらけになっていた。

ダメージは、1を越えている。

10歳では無いでいいなが、十分だ。

装備を『幻夢の双剣』ツイン・ホーンティッドから、遠距離兵器に換装する。右の肩に担いだのは、大砲だった。

「まだまだあー！」

ドンッ！と、一発。

しかし飛び出したのは砲弾じゃない。

そんなものは、獣王の拳を前にすれば、碎かれるだけだろ？

なんぞ大して存在感を見せられない。

だから升り出しだのは 手綱力

「ケダモノにはお似合いだらうー。」

「いなんものでー。」

獣王は、身を包んだミスリル製の網を……引きちぎりやがつた！？

さすが竜種と並ぶばけもんだな……そりゃ人間くらい挽肉になるわ。

ドンッと、下がり続けていた俺の背中が、木にぶつかった。

両手よりも横幅の太い、立派な木だった。

「しまつー！？」

逃げ場を無くす。

獣王は、にやりと笑い、身を低くした。

跳ねるために、足に力をため込んだ。

「フラグぅうううー。」

絶望からのディーナの声。

そうだ、俺が下がりに下がって作ったこの距離。

木を背にして逃げられなくなつたこの距離こそが。

潰された不正プレイヤーたちが掘まつた距離。

そう。

(やつの間合いだ!)

オオオオオオオオオオオオ!

獣王が飛んだ。

俺は足がすくんだように腰をかがめた状態のまま……。

にやりと笑う。

「伏線は張つてたぜ?」

バイク。

俺は武器を呼び出した。

なにも持つていなかつた手に、予兆もなく6メートルはある竿状の武器が現れる。

しかし、そのバイクは、俺には装備できない高等品だ。

俺は、その柄を木の根元に置き……。

「!?

獣王の目が驚きに見開かれる。

飛びかかった獣王に、回避する術はない。

空中では、方向を変えることも許されない。

そして、穂先が獣王に触れる直前、俺は槍から手を離した。

そうすれば、そこにあるのは、ただのバイクだ。

ただの武器だ。

武器としての命中率や、攻撃力は意味を無くすけど……。

決して折れることのない、レベル150のティーナが愛用する武器の一つ、ミスリル製のバイクは、硬く、鋭い。

十分な凶器だ。

そして必殺の獣王の動き。

その加速もまた、この眼の助けになる。

加速のついた獣王の巨体は、自分から槍へと突き刺さっていく。

獣毛がそれを拒む。

バイクが木と獣王に挟まれて、大きくしなった。

しかし、折れない。

獣王の体が、槍につつかえ、曲がり始める。

均衡は一瞬のことだった。

獣王を跳ね飛ばすだけに終わるかと思つた。焦つた。

しかし、ミスリル製のバイクは、獣王の腹に突き刺さつた。

そして獣王の腹に穴を空けたとたん、バイクはしなりこよつて溜めに溜めていた力を解放し、一気に深々と貫いた。

ドン、つと……。

バランスを崩した獣王が、腹を貫かれたまま、背中から木にぶつかった。

勢いのすさまじさに、木が折れて吹っ飛んだ。

衝突した獣王は、跳ね飛ばされた格好になつて、さらにその向こうへと転がつていった。

地響きを立てて横たわる。起き上がるうとして、どすんと失敗し、ぱたりと尻尾を落として、沈黙した。

その体の下に、赤い血が広がつていく。

「あなたに言つてもわかんないだらうけど」

俺は、緊張から強ばつている体にむち打つて、立ち上がつた。

「システムの穴を探すのが、廃人つて人種なんだよ」

ヴァーチャルリアリティ。

このシステムは、加速や、荷重といったものさえも、リアルさを追求するために、数値として実装されている。

それは武器に破壊力を与えたり、速度を加味したりと、様々な効果を生んでいく。

そして武器に限らず、道具などは、文字だけの存在ではなく、ちゃんと捨てることも、置くこともできる。

つまり、罠を作れるのだ。

設置された罠は、そこに働いている物理演算の結果をエミッコレートして、どの程度の効果があつたのかを決定する。

ミスリル製のバイクには、魔法効果はついてない。

だから、ディーナから、倉庫であるフラグに預けていた武器だった。

た。

だけど、レベル150のディーナ用に取っていた武器ではあった。

それは、レベル100程度のキャラクターには、十分すぎる凶器だった。

『ふつと、獣王が血を吹いた。

「……終わつてみれば、一撃も、か」

そして、ぐぐっと、無理に頭を持ち上げた。

「見事だ」

そして俺を見て、……笑いやがつた。

「なんだよ」

「フラグ……」

ディーナが近寄ってくる。

俺の側に立つて、怖がりながら獣王を見る。

ディーナには、不思議だったようだ。

「どうして、あの力で……」

獣毛による、絶対防御。

あの力があれば……と言いたいんだろう。

俺もそれは思った。下手すると即死の傷だ。こんな怪我を負うようなことになつても、あのスキルは使えないのか……。

獣王は語る。

「身を捻れば……と」

「…………」

「檜に、ねじれを生んでやれば、と、な

しなつて いる最中にねじられれば、槍は固定から弾かれ、外れた可能性があった。

それは確かにそうかもしれないけど……。

「俺は、けだものではない」

「そうか？」

「だから、技に、焦がれる」

「…………」

「あのよつな……、意味のわからぬことを口走る姿、力なぞ

それに……と。

「俺は、置き去りにしたのだ」

「なに……？」

獣王の瞳が潤んでいた。

ふるえて いる？

怯えて いるのかと思つ。なにに？

その瞳は、俺と、ディーナ、並ぶ一人の姿を捉え……。

「まさか」

母虎さんの言葉を思い出した。

「こいつは、母虎さんたちを置いて、他の……。

「お前……。」

ああと、こいつは首肯した。

「突然、よくわからないことがわかるようになつた。……そういう気がしただけかもしね。思つただけかもしね。だが、結局のところ、俺はリーダーとしての責務を果たさず、じりく……」

左腕に重み、ディーナだつた。
すがつてきている。彼女には、なにを言つてるんだかわからない
んだろう。
だけど俺には想像のつくことだつた。

(管理者に乗つ取られたのか?)

不正規ユーザーを肃正するためのアバターとして、外部からコン
トロールされたつてことなんだろうか。

もしかすると、もともと獣王の中に、そんなプログラムが組まれ
ていたのかもしれないが。

と、そんなことを考へてゐると、ぱたりと獣王の尻尾が揺れて落
ちた。

「俺は、逝く

ゆつぐつと頭を横たえ、目を閉じた。

「待てよー。」

「マリアは、頼む

「おーーー。まだ間に合つかもしれないだろーー。」

「…………

「死ぬなー！」

俺は獣王の前に膝を突いた。

刺さったままのバイクを消す。アイテムとして収容する。

抜ぐと臓器を余計に傷つけそつだつた。だから消した。

開いた穴から、ビュッと血があふれ出す。

「フ、フラグー！」

周囲ががさがさと騒がしい。

「プリンだった。

その内の一枚が、木を裂いて作つた粗末な槍に、俺が置き去りにしてきた男の首を刺して掲げていた。

俺はかまつていられない、ティーナに告げた。

「なんとかしてくれ

「なんとかって」

「なんとかだ！」

俺は、あいつたけの武器をぶちまけた。

そして秘薬級の回復薬をあいつたけ取り出し、獣王の傷に振りかけた。

おまけに回復の君を呼び出し、獣王に付ける。

凄い勢いで回復魔法が使用される。

一秒間に五回も六回も……エフェクトが重なりすぎて光りっぱなし。

妖精が使える魔法が低レベルな上に、獣王が瀕死だからだ。千に届くヒットポイントを、一桁が最高の魔法で回復させようすれば、連続使用もしかたない。

回復の君は、MPが切れて消えるだらうナビ、獣王の腹の傷がふさがってくれれば十分だ。

「たのむ、たのよ、ちくしょー……」

祈る俺の側で、ティーナがおろおろとしている。

「フ、フリグ……まだ増えるよ……」

周囲を取り巻くゴブリンの数が多すぎた。

アイテムを使って、防御結界を展開する。でもこの数だ、破られるのもすぐだろう。

俺は竜の牙を持って立ち上がった。

死んだプレイヤーのことよりも、NPCが死にそうになっている」との方が恐ろしいなんて、どうかしてるとも思ったけど。

(NPCじゃなくて、モブでもなくて、生きているってんだろう?)

それが異世界転生のお約束だ。

だから、プレイヤーも、NPCも、平等だ。

基準を作るなら、どっちが身内に近いかだ。

俺は知らないプレイヤーよりも、親近感のわくこいつを取るー。

「母虎さんや、子虎残して、逝くんじゃねえよー。」

牙をゴブリンへ突きつけた。

「もともと、お前らが俺の狙いだ! かかるところやあ!」

俺は怒声を張り上げ、^{ヒート}氣を引いた。

けれど、俺につられたのは『アブリン』じゃなくて……。

多くの雌の虎種たちが、森の奥から飛び出してきた。

長くなつたので一分割(2)(後書き)

このお話の大半はみなさまの注意によつて誤字脱字が修正されていきます(、)、ありがとうございます

タイトル詐欺（一田田じゅねーじゃん！）

ゴブリンが吹っ飛んだ。

いやもひ、そう表現する以外になかった。

俺たちを取り囲んで、興奮していたゴブリン共が、まんまと空中に跳ね上がっていく。

雌虎さんたちの第一陣による突貫だった。

四つ足で、加速をつけたまま突入し、ゴブリンを跳ね飛ばして駆け去つて行つた。

第一陣は、飛んできた。

跳躍し、押し倒し、引き倒し、押し潰し、噛みつき、碎き、殴り飛ばした。

その一撃^{いと}に、ゴブリンの肌が裂け、部位が吹っ飛び、体^いと跳ねた。

一方的な蹂躪^{じゆりく}だった。

なんだこれ？

「つえー……」

やがてその動きは、俺たちと獸王を中心として、渦を

巻くよつい回り始めた。

やうやって、外側から内側へと、ゴブリンを屠つていぐ。

ゴブリンは外周を押さえられて、逃げ場をなくしていた。

雌虎たちの目に怒りが見える。

一匹も逃がさないつもりなのがよくわかる。

この一方的な殺戮は、ゴブリンが全滅するまで続けられた。

……虎って、雄のテリトリーの中にいるけど、その中にも自分たちのテリトリーを持つてて、そこは自分で守ってるんだよな。

弱いわけがないわけで……。

怖かったです（ ）、

「ふーっはっはっは！ 壓倒的じゃないか、我が群は！」

ん？ なんかどつかでこの台詞、聞いた覚えがあるな……まあいや。

あれから一週間たちました。

目前では小虎の集団が、「わー！」って感じで、「ボルドたちを追いかけてる。

場所は獣王のテリトリーだった森の中です。

「コボルドは、犬っぽくキツネっぽい頭を持った妖魔で、人よりも貧相で小柄な感じだ。

小狡い印象が強く、実際ずるっこい。小型の剣と防具は、どうからか盗んできたか、死体を剥いだもんだろうな。

魔法を使うほど頭は良くないけど、道具を扱うくらいには器用だし、コボルド同士なら通じる言葉をもつてゐるくらいには、かしこかつたりもする。

小虎たちと大きさはほぼ一緒に、良い遊び相手だらう。

……必死のコボルドたちには悪いけど。

楽しげに遊んでいる小虎たちを眺めていると、その内の一匹が、追っていたのとは違うコボルドに足を引っかけられて転がった。茂みに隠れていたやつが、仲間が通り過ぎるのを待つて、棒を伸ばして引っかけたんだ。

うむ、まだまだだな。

なんてえらそうに、胸の前に腕を組んでふんぞり返つてみる。

ディーナの時には、さりげなく胸を乗つけるみたいにして、強調してみてたんだけど、男だとむなしいなあ……。

「コボルドが使ったのは罠だ。でも、俺が獣王に使つた罠とは違う。

俺はあの時、バイクから手を離していた。つまり、罠は純粋にそれ単体での発動状態になつていた。

もし俺がバイクを支持したままだったら、獣王は俺つてプレイヤーキャラに対する防御、回避補正を適用し、罠を回避していたかもしれない。

公式じゃ、あんな即席の罠の作り方なんものは、公開していない。

これはプレイヤー有志で、「こんだけシステムが凝ってるなら、やれるんじやね?」と、実験して編み出していつたものだった。実際、これは大きな武器になった。強大な敵は堅いだけじゃなく、とにかく攻撃が当たらない。

だから、回避補正を無効にできる、罠を使って戦ったわけだ。ヘイトを稼げば、敵は集中して突進していくようになる。それを利用し、はめるわけだ。

そして戦っている最中には、計算式の中に組み込まれる回避補正も、罠が相手だと適用されない。

つまり、NPC／モンスターとしての、AIの反応速度のみで、回避の合否が行われることになる。

しかし、AIには、そこにあるものがただのオブジェクトなのか、罠なのか、判別できる能力がない。

結果、ハメ放題の図式が出来上がっていた。

まあ、いざれは修正が入るだろうと、みんなが思っていた。けれど、予想外に、公式はこれをアリだと認めてくれた。

まさに、知恵と勇気を動員した戦いになるし、実際に、モンスターが物体を罠だと認知できるのかどうかという、問題があつたからだ。

おかげで、名上の相手とも戦えるとこう楽しさが生まれていた。

周到に準備をして、格上のモンスターを狩れば、一気にレベルを上げることができる。

地道に敵を倒して経験値を稼いでいても、まあ、かかる時間は似たようなものだったけど……。

ルーチンワークをこなすよつは、よっぽど楽しい時間だったよ。

仲間を募り、罠のための資金提供を呼びかけて、モンスターの狩り場を決めて……。

罠を設置して、モンスターを誘導して、はめて、それからみんなで、わーっとかかってて。

それはVR以前のMMORPGじゃ味わえない楽ししさだった。

もつとも、ドリゴンレジンドの仕様があつて、はじめてできることだったのかもしぬなかつたけど。

楽しかったなあ……。

「…………」

ディーナがじーっと見てくる。いかん、現実逃避もここまでか。

一応虎種なんだから、コボルドが持つた道具による罠は、回避補正で避けて欲しい。

前転気味に転がされた小虎は、そのまま一回転して、またわーっと追っていく。

四つ足になっちゃつてゐる。

その手足には鉄製の爪のついた武器がはめられていた。バグナウだ。手つ甲から鋼の爪が三本から四本伸びていて、引っ搔くように敵を斬る武器である。

ただ、獣人のように、よほど筋力に恵まれないと、切ったときの抵抗で、逆に手首を痛めかねない。

もともと手と爪で戦う虎種には、爪の延長、強化って感じで、実際にぴったりの武器だった。

母虎さん マリアさんの子供の子虎は、俺の首んとこに乗っかり、「おーー！」と仲間の様子を眺めて興奮していた。

ふんふんと鼻を鳴らして、うずうずと体を揺らしている。だけどだめだぞお、お前雌だから。これ、雄ツ子の訓練だからなー。でも油断したら行っちゃいそつだから、肩にある足はつかんでる。

小虎は合わせて十六匹。なんでこんな引率まがいのことになつてるのかと言つと、獣王が出奔して、母虎さんを含んだ雌虎さんたち総勢十一匹と子供たちの面倒をおしつけられてしまつたからだつた。

……どうしてこうなつた？

「助かつた、といつべきなのか」

回復した獣王は、苦笑いを浮かべていた。

座り込み、周囲に立つ雌虎さんたちを見上げて、彼女たちの表情

に、ふんと鼻息を吹いた。それから俺を見て、後は頼むと、突然言い出したんだ。

「なにを頼むんだよ

「俺は負けた。雄に負けた。ならばテリトリーは譲らねばならん

「いらねいつの」

「こいつらが認めん

「お前が旦那だろ」

「こつらも、お前の女になった」

「マジ? いつてえ!」

ディーナに尻をつねられた!

「なにすんだよ!?

ふんつてそっぽ向かれた。なに?

「俺の……つて言つたくせ!」

「なんか言つたか?」

ふいつて、といつて中向けられちつたよ。なんだよ?

そんなことをやつてる間に、獣王は立ち上がつていた。

「では、な」

「エリートへ行くんだよ?」

「セヒナ……また、俺のものにできる場所を探す……それだけだ」
虎つてのは、セヒコの生き物なんだかね?ふと、嫌な想像
がわき上がった。

(セヒヤツヒ、放浪して、別の場所にまたロードを作つて、エリ
トンに襲われて……このイベントを繰り返すつてのか?)

俺たちゴーザー、プレイヤーのために、ヒ。

セヒは思ひたくはなかつた。エリはゲームの世界じゃないと思つ
から。

だけど、ゲーム的なあのアナウンスが、耳について離れない。
獣王の口から流されていたメッセージにつけてもだ。

あんまり、獣王の體中に哀愁が漂つっていたものだから……呼び止
める」ともできずに、見送つてしまつて。

俺は、獣王が見えなくなつてから、せひと、雌虎たちのエリ
を思い出した。

「あなたたち、セヒさんのおー?」

なんだか赤くなつてもじもじとされました。

「マジナーヴ」

「うへつと頷かれた俺の脳裏に、ねえさんの言葉が反響した。

獣姫もよ、もよ、もよーーー。

そんなわけです、はい。

「ヘンタイ」

ぼやつとじトイーナ。

「ちやうからねー? ヘンタイちやうよー?」

「母虎さんと寝てた」

「ちやうからねー? 子虎が寂しがるから母虎さんと一緒に寝てあげただけだからねー?」

「母虎さんの胸にむねむねしてた

「だつてディーナより大きくてふくらしてわらかそつだったんだもんー!」

「ぶつとばされました。

「ばかあー!」

怒り肩で帰つてつけたよ。

びっくりした小虎たちが、全身の毛を立たせてふりへりしている。
おーおー、怖かったよな……「ボルドたちはその間に逃げてつ
た。

別に依頼を受けてきたわけじゃないから良いんだけど、ここに
らが一人前になってくれないと、獣王の持つてたテリトリーが、他
の虎種に取られる可能性があるからなあ……。

「俺はけだものじゃねーから、テリトリーとか守つてられんじ

はあーあと、ため息をいきしつゝ、今日戻るやつと一緒に集合をめた。

「へたれ

「ハゲツー.

「ユウコー. おしゃべりナゾー!

「こやこやこや、なこですからー」

酒場である。

ねえさんを呼び出し、相談中だ。

「んで、雌虎さんたむは？」

「とつあず、ギルドに登録して、宿場に宿を持つてもうこまました」

「登録できるんだ」

「その辺、ゲームじゃなにってことなんでしょうな」

「ん～～～？ それも含めてイベントだったり？」

「あれか……」

「あぬいは……群れのコーダーってことで、全員があんたの戦力扱いだとか？」

「なにそれ俺が怖い！」

「あ、あと、虎って、確か別の群れに合流するとき、前の田那の子つて殺しちゃつたりとか」

走り出さうとしたら、さすがに止められた。

「無詠唱で捕縛呪文とかかけないで！」

「あなたその台詞マクロで登録してあるでしょ」

「こつもの」とですか？

「手えぬくな。あと冗談だから。モチツケ」

とりあえず座り直した。

「まあ小虎たちも懐いてくれてるし、雌虎さんたちも落ち着いてるし、お金もあるし、特に問題は見当たらいいんですけどねえ」

もちろん俺がパトロン役です。

「お金かあ」

「ねえせん?」

「ため込んでたのと、同じだけの額のお金があんのよねえ」

ああ、そのことかと納得した。

プレイ中に、お金はしこたま貯め込んでいた。
なんとこっちの世界でも、その額が維持されていたわけだ。
雌虎さんと小虎たちの生活費……養育費……飼育費？　は、そこ
から出している。

「ぶつちやけ、仕事する必要がありませんよねえ」

「まつたくねえ……」

おそらく、だけど、俺と姉さん、一人の所持金を合わせれば、街ど
ころが国が買えるくらいの額になると想つ。

俺たちがやり取りする武器や防具ってのは、それでも足りないく
らいに高額なものがいくらでもある。

だから、ため込んでいたんだけど……。

「ねえさん、競売とか覗きました?」

「くそなのがないのよ。前はそうでもなかつたみたいだから、お仲間が引っ込めたんじやないかって思つてるんだけど」

俺たちのような連中が、手元に残すことを選んだってことか。そりゃヤツだよな。ゲームだから、死んでも復活できるから、だから旅や冒険に出でられたんだ。

命がけとなると、そんな勇氣は起きられない。

その上、一生不自由なく生きていけるくらいこのお金があるなら、引きもつたつて良いんだわ。

「あなたの話だと、RMT^{コントローラー}やつてた連中の動きとかも気になる」

「潜伏とか闇組織作りですか？ そこまでしますかね？」

「不正ログインはともかく、RMT^{コントローラー}の世界じゃ無関係の、あいつでの行為でしょ？ んでもつて、RMT^{コントローラー}やつてた連中は所持金やアイテムを、全部リアルのお金に換えてたわけだぞ」

「うちは、くそな装備も、金も持つてない？」

「だから……つてのが怖いんだけど……。RMT^{コントローラー}に出でるような、レア装備を集められる高レベルプレイヤーではあるわけだしね」

でも、だからって思つんだけどなあ……。

「この世界、『パブリコン退治』をやつてるだけでも、食つていけるんで
すけどねえ」

好き」のふで闇組織とか作るのかなあ？　って思つんだけど。

「アーニは、あんたにぴつたりの世界よねえ」

くくくと笑う。

これは別に皮肉じやなかつた。俺が前からそつぱつてただけの話
だ。

だつて、そつだらひへ。人の顔色うかがつたり、一生懸命『パブリ
ニケーション』を取らなくつたつて、ぶんぶん剣を振つてれば、食つ
て寝て、遊んでいられる。
良い世界じやないか。

獣王のことを思つと、微妙だけビレ……やつこや『パブロマン』、ビ
うなつたんだる。

「ねえさんは、これからどうするんスか？」

「ん~~~？　とつあえず王都に行つてみるわ」

「王都行つ？」

「うそ。あたしの設定が生きてるなら、城の中でも自由に歩き回れ
るだらうしね」

城がらみのクエストなら俺もクリアしてみしね……。

「てかなにしに行くんスか？」

「暇だから？」

「…………」

「だつてやることないんだもん。暇つぶしくらいには見つけたいしね
」

そんなことを言しながら、ぐびぐびと酒ハーレルに口を付ける。

初めての酒……一応、俺が無事に帰ってきたお祝いらしい。

自分で地獄にやつておいて……。

そんなわけで、ねえさんに付き合い、つきあい……突きあいはしませんでした、はい、いちおうあの人、リアル幼女なんで。

送り狼にならずに送つてきましたよ。

いまその帰り。

夜風が酔つた体に気持ち良い。

酔つた姉さんは色っぽかった。

ついでに無防備すぎるし胸でけー。

中身は子供でも外見は大人なんだよなー。

もみもみしたかった……したるべきと、自動起動した護衛精靈か魔獸に瞬殺されてただろうけどさ。

でもなー、あの人、この世界じゃ、一応は大人なんだよなあ……。
ねえさんも、いつかは誰かとしちゃうのかなー。

……いかん、その歳で初めて？　なんて言われて極大魔法を唱え
始めるねえさんの姿が思い浮かんだ。

あの人があの組んだ魔法はパネエからなあ……あんまり酷すぎて地形
破壊起こしてポリゴン壊れてポリゴンの裏側の世界に全員が落とさ
れて『ハヴォック神』なんて異名もついたくらいだし。

ハヴォック神がなにかはググってくれ。

ちなみにその魔法は、運営から不許可出ました。

……運営から泣いて頼まれるコーナーってなによ。
そんな具合に、良い感じでふらふらと~~~~。
俺もだいぶ酔っていた。

「ただいま~~~~」

……つて、もう遅いか。
みんな寝ちゃってるし。
宿の中は静かなもんで、しーんと静まりかえつてた。

「ティーナ~~~~」

……は、だめだ、起きてる、怖い。
寝てるふりしてる背中からオーラが立ち上つてゐる。

「そこ」と避けよう……。

なんだこの流れ。俺は駄田亭主か。

母虎さんといは……雌虎さんたちにはそれぞれの宿だけど、子虎が俺から離れないんで、母虎さんだけは、俺んとこに泊まつてもううことになつたんだ。

あ～～～、だめだな、子虎と良い感じに眠つてら。

しうがねえ、台所で寝るか。

い、椅子があるから、ベッドなんていらぬんだからねー。

とこうわけで、「う」と一人がけの椅子を並べて寝床を作る。

横になる前に……もつかよつとだけいつとくか。

床下の収納庫から酒瓶を……お、これは？

俺は、おおおおおーっと、それを掲げて広げてしまった。

「H本！ いやアダルト本！ いやよつこいは格調高め、H口本と呼ぼつー。」

えつる本、えつる本つと、高々と掲げて踊つてしまつた。

「めんなさい、酔つてたんです。

酒もある。寝床もある。H口本まである。

「リリがパラダイスか

それじゃあと、振り向いたら……。

「それで？ あんたはそんな本持つて、なにするの？」

半眼のティーナと、子虎を抱いた母虎さんがいました。

「……そろぶれい w」

蹴りレベル255の股間蹴りをもらいました。

……最後の一撃は、せつない（T^T）

て、てこ入れなんかじゃないんだからね！

「無限に広がる大宇宙、か……」

「殺意のわく言葉ですよえ……とくに漂流中だと

「まったくだ」

彼が漂っているのは、銀河と銀河の狭間にある空間であった。

宇宙戦争も亜光速があたりまえとなると、一戦闘領域も銀河規模へと拡大し、ドッグファイトに夢中になれば、指標のない空間へ飛び出してしまつ」ともじばしひばであった。

迷子の誕生である。

外から見る銀河の群れは数多く、自分がどの銀河からやつてきたのか、わかるものではなかつた。

意外と多くの電波は拾えるので、その中からあたりをつけて、あとは「ロードスリープを併用すれば、運が良ければ戻れるかもしれない。

ただし、戻ったときには数百年、数千年、数万年が平然と過ぎていって、戦闘は終結し、別の区域 銀河へと、戦域が移動している可能性があつた。

戦闘自体が、光速を越えているために、他の艦船とは時間の流れが違つてしまつてゐる。

そのため、普通に戦闘をしていても、母艦へと補給に帰還すれば、

船の中は世代を交代していた……といふこともよくあつた。

あちこちで、違つた時間の流れの中では戦うことになるため、それを修正するような無駄な行為は排されていた。

現在では、言葉が通じて、倫理や道徳観がかけ離れないよう、電子精霊、電子妖精によつて、適宜修正が行われている。

だから、戻つたときに、もう知つた顔に会えない……といふことは、日常的なものなので、特に悩むようなことでもなく、彼らとしては、元の戦域へ帰還するか、それとも生存可能な領域へ避難すべきか、そのことだけが議題として上がつていた。

彼らもまた、戦いに身を置く者だつた。

宇宙戦争とは言え、巨大な陣営があるわけではない。利害の不一致によつて起こる小競り合いが、拡大しているだけであつた。

狩る者と狩られる者に別れ、かすめ取る者や邪魔者などが現れる。結果、何十という軍団が入り乱れ、混戦を究める結果となる。

彼は、そんな軍団の一つに、自分を売り込んだ傭兵だつた。

ただしくは、自分の作った船の威力を見せつけるために、参戦した者だつた。

正面からは菱形、上方からは、前方に長い一等辺三角形、後方に短い二等辺三角形をくつつけた形をした、白亜の船だつた。

左右には本体を小型化した艦を接続し、補助艦……というよりも、翼のように扱つている。

その翼の後部からは、青い炎が伸びていた。ジェットではない、不可思議なエネルギーだつた。

「無限加速つて、無理合つたかなあ」

「一瞬ですっごびましたもんねえ」「

補助艦は前方の空間密度を操作し、薄くする。

この結果、艦全体が前に吸われ、引っ張られ、加速する。

後方に流れる光は、破壊された空間の残滓であった。

「どうするかなあ」

「艦内の農場ファクトリーは稼働していますから、百年は大丈夫ですよ?」

「クッションシートに座る男性の年齢は二十歳ほどだった。」

その右手、肩の辺りに、ふわりと女性が浮いている。

十代前半とも、二十代後半とも思える不思議な女性だった。透けている。

顔が幼く、髪は長く、ふわっとふくらみ、その体は細身ながら、触れたくなるような柔らかな量感を持っていた。

だが決して触ることはできない。

彼女は艦の電子精霊 ホログラフィックであった。

「俺の寿命の方が先に尽きるわ」

「ですよねー」

口元に右手の甲を当てて、じろりと笑う。

「じゃあ子供でも作ります?」

「なにが悲しくて、ダッチワイフ相手にクローン作らなきゃならんのだ」

「ちゃんと中に入つてあげるのに」

「勘弁してくれ……」

パイロットが人間である以上、生理的欲求の存在は避けられない。が、男、レイドはその手のことが苦手なのか、恥ずかしいのか、焦った様子で彼女を落ち着けた。

電子妖精は、絶対にパイロットを嫌うことがない。そのようにプログラムされているからである。でなければ、命のやり取りをする場所で、パートナーとして信頼することはできない。

彼女、シルフィードもまた、そんなプログラムがインストールされていいるという前提の元で、成長、育成、変化してきた、まさに理想のパートナーであった。

ただし、本来の持ち主にとつての、である。

シルフィード
この艦が完成する直前に、艦の強奪事件が起こりかけた。その際に、本来のパイロットが死亡し、設計、建造にあたっていたレイドが、シルフィードのパイロットとして、登録を行つたのだ。

このために、シルフィードは親友の恋人、幼馴染みだった人、そのような、友人的な感覚の存在として、性格付けが行われてしまつ

ていた。

「で、だ」

レイドは、田の前をふよふよと仰向けに漂いながら、複数の投影型ウインドウを操作している彼女を眺めた。

「それだけ落ち着いてるとは、なにがあるんだ？」

「なにかってほど、良い話でもないんですけど」

はいっと、ウインドウの一つを押して流す。

その電子表示を受け取って、レイドはページを繰つていった。

「救難信号？」

「何千……何万年前のものかわかりませんけど、億年単位じゃないですね」

「これが良い話か？」

「運が良ければ、この人たちの子孫が、居住可能惑星で、文明を築いていると思います」

「滅んでなければ……つてことだら？」

「ひとりぼっちよつは良いんじゃないかと」

移民船団や商船、娯楽使節団など、銀河間を航行し、行方不明になっている例は数多い。

どれだけ注意したところで、運が悪ければ光速近くまで加速した岩塊に貫かることだってある。あるいは、空間の歪みに飲み込まれることもだ。

そんな状態でも、帰還が難しいとなれば、手短な星を見つけ……それが居住可能惑星ならなお良いが、場合によつては惑星改造を行い、星に根付いて生涯を終えようと、彼らは前向きに散つていった。これらの子孫が、遙かな後に発見されると喜びことは、珍しくなかつた。

シルフィードが見つけたのは、そのような者たちが、大昔に発信したのであらう信号であった。

「ま、行く当てもないし、行つてみるか？」

「と、いうか、もう、向かけやつてますけどね？」

勝手にしてくれと、レイドは肩をすくめ、そのままシートの機能を立ち上げて、スリープモードへ移行した。

次に目覚めたとき、彼は大気圏を自由落下中といつ、燃え死くる直前の状態になつていた。

……そしてその頃、彼らが向かう先で、主人公は。

「ティーナさんは怒つてクエストに。家主の居ない家で母虎さんに食べられちゃうのはまずいと思った俺は、旅に出ることになつたのです」

「誰に言つてんの？」

突つ込みはねえさんです。

「食つちやえぱいいじやないの」

「オタクを舐めないでよね！」
^タレ

臆病な生き物なんです。

俺たちはいま、見渡す限りの平原を歩いてます。
おお、ギガントディアスよ、いつの日か。

「テレビポートで即帰還だけどねー」

「情緒がない！」

「子虎にコトランって名付けたあんたよつマシー。」

「コトランちやんは、ヒラマキトカゲつぽこ体長一メートルくらい
のなにかを追いかけて行つちやこました。」

「行かないで～～～！」

母虎さんに殺されるから～～～！

しかも速ええよー、あつとこつ間に見えなくなつたんだよー。

気がついたら俺の荷物がもつこつして、コトラン押し込んだのは母虎さんらしかったです。

母虎さん、どうこいつをつぶす……。

だがしかし、わかつてることが一つだけ……。

コトランになにかあつたら、俺、きっと狩られる……。

そんなガクブル状態で、俺は現在、迷子のコトラン捜索中です。

科学と魔術が交差するとき、大惨事が起ります。

非常事態につき、スリープモードを解除します。

且覚めたとき、「クピットは激震に襲われていた。

「シリフィードー！」

「警告します。次元跳躍後、未登録惑星の重力圏につかりました。
現在降下中です」

「どうして離脱できない！？」

「惑星全体が未知のフィールドによって覆われています。バリアと思われます」

「ぶつかつたのか！？」

「突破時にシステムの一部がオーバーロードを起しました。現在
冷却中。復帰まで一八六〇時間」

「フォトンブラスター！」

「レベルは

「最低出力だ！ 大気に穴を開ける程度で良い！ 突破口を作る！」

「撃ちます」

艦両脇の副船は、減速のために前後の向きを変えていた。

逆噴射を停止。ぐるりと回転し、向きを正すと、先端部に発光体を形成する。

空に大気を切り裂く光が放たれる。

発光体が大気を貫き遠く走った。

「コクピット内の、摩擦により赤くなっていた景色が、青と黒に落ち着いた。

ブラスターによつて大気が消失し、数秒の間ではあっても、宇宙と同じ無の空間が誕生していた。

手に入れたわずかな時間を制御に費やす。

機首を上げ、船の腹を落下方向へと修正する。

摩擦対策のために、船首に張つていたバリアを、艦底部に集中させ、船体の巨大さによる抵抗を利用して、減速をかける。

「間に合つか！？」

「成層圏を抜けます」

「スラスターつ、バーニアも！ 逆噴射つ、全力だ！」

「了解」

副船が回転、後部を下、やや前方へ向ける。

大気圏内航行用の推進剤に火を付ける。

同時に、艦下方全体で、複数の小型シャッターが開かれた。いちからからもジェットが火を吹く。

雲海を踏み抜き、突き抜け、それでも落ちる。

「足りません」

「ガジェット放出！」

副船の外側が開き、小型の尖塔型機械が5つ射出される。それは船の下方に1つ、船の前後左右に4つ位置し、それぞれが光のラインで繋がれた。そして四角錐のバリアを形成する。

「ショックアブソーバ全開！」

「イナーシャルキャンセラー全開。吸収しきれません。備えてください」

「ぐうー！」

内蔵が口からまる」といぼれようとした。眼球が飛び出し、血が溢れようとした。

非常事態と判断した機能が、コクピットをジエルで満たす。

地表はもう、目前だった。

「警告。落下地点付近に生命体反応複数。内、知的生命体と判断できるものが2から3。不時着の衝撃波に巻き込みます」

「なんとっ……かつ！」

「無理です。落ちます」

「くつそがあああああああああ！」

その日、誰もが空を見上げた。

「星が落ちてくる」

とある国のある姫が、王城のベランダから祈っていた。

空を青い光が貫き、それを追うように、光の玉が落ちていく。

それは貫かれた大気が起こした屈折現象と、墜落中の船の姿でしかないので、彼女には、空を駆ける天使と、それを追う魔物の姿のように捉えられた。

一方で、のんきなやつらがここにいた。

「つかまえたあ！」

じたばたと暴れる「アーリー」……こやもひと可憐へ、ソルヒルと呼んでやうひつ！
「」とらんを背後から抱き上げる。

「一つと唸つてもだめ！ 取らないから！ その口にくわえてるの取らないから！ むしろ触りたくないくらいだから！ なんかびちびち跳ねてるけど！ トカゲの尻尾っぽいけど… やたら太くて長くて気持ち悪いし！

背丈の高い草の原っぱから、虎尾だけひょこと立たせて、やらゅら揺らしてるとと思つたら。

トカゲっぽいやつが逃げようとするのを、びたつ！ びたつ！ つて、手で押されて遊んでたんだけども！

獣王と母虎さんからなんでこんな野生児が……野生児っていうか本能まんまだなこいつ。

「おーい」

「ねえねえ」

「なんか落ちてぐるみたいよー」

「え？」

空を見上げると。

「なんだあれ？」

「隕石じゃない？」

「誰かメテオストライクでも使つたのかな？」

「あれ、国が滅ぶレベルよ？」

「てか、マジナイトに来てないツスか？」

「うん……みたいね」

平気じゃないです。

一人ともすつばー冷や汗がいてます。

「じらんだけ、手えのばしてわきやわきや動いてます。だめだからね！ あんなの抱っこできないからね！」

「えつと……逃げます？」

「間に合わないんじゃない？」

「ですよねー」

テレポート系の魔法や道具もありますが、使用開始から効果発動まで、三十秒以上必要になるんです。

あははははと、笑つてみると、ねえさんが、ぱつとマントをひるがえした。

ちえー、ぱんつ履いてる。

「あんたあとでお仕置を」

「なんできれたしー。」

「ログをこしょい」

「しまつた！ 設定いじってなかつた！？」

全部を一回ログ化するのはやめて欲しいー！
どうも、言葉はメッセージウィンドウを経由して発信されているらしいんだ。

思考がメッセージウィンドウにテキストを打ち出す。
そのテキストはこの世界の言語として、自動翻訳されてから、外へと発信されている。

逆に、外の言葉は、こっちの言葉として翻訳されてウィンドウに表示され、俺の頭に入ってくる。
これがあるから、通じてる。

虎種みたいに、明らかに人間と違う舌と喉を持つてる人種が相手でも、このシステムを経由しているから、会話が成立しているみたいだった。

今のところ、俺とねえさんだけしか、メッセージウィンドウの存在に気付いてないから、プレイヤーでないと、わかつてないことがのかもしれないけど。

問題は、やつきも言つた、設定だ。

たとえば、普通の会話として話す「SAY」、無制限に叫ぶ「SHOUT」、特定の相手だけに語りかける「TALK」、メモ的に使う「SOLOHEALTH」、これらが俺の思考として、ログには流れてるんだけど……。

デフォルトで、独り言がフリーでダダ漏れにされてるのは、「聞こえてるから」「口に出てるから」という、お約束のためだつた。日本文化に特化しそうだつ、このゲーム。

最初は全部の機能がオンになっていますので、必要ないものはオフってくださいとか、どつかの〇か、このゲームは。

というわけで、SOLTHOLOGYを、人から見えないようじオフシヒベ。

これでねえさんのメッシュセージウイングウには流れなくなつたはずだつた。

……てか、ディーナや他の連中には、考えがばれてなかつたし、
基本的には、口に出来る言葉以外、伝わってないはずなんだよな?
じゃあ、ねえさんは、メッシュ見ながら会話もしてるのかな? 僕はそこまで器用じゃないから、必要なときだけ見てるんだけど。

そんなことを考えてる間にも、ねえさんの準備は整つていた。

やつたらでかい魔法を構築してたらしい。結構時間がかかつたな。

前にも言つたけど、魔法はイメージネーションによつて形成される。

ドラゴンレジョンの場合は、属性、威力、範囲……他、様々な要素を選択していく形式だ。

思考整理型のエディターといつものがある。カードを作り、それをラインで繋げ、関係性を見直していくエディターだ。

ドラゴンレジョンの魔法は、これと似たものによつて、プレイヤーが個々に魔法を編み出していく形式だつた。

呪文や呪言、いろんな形でインスピレーションカードを獲得し、それを繋げていく。もちろん、繋がっている順番に魔力が流れて、魔力が形成されていくので、おかしな順に並べていると、思わぬ作用が引き起こされたり、なにも起きなかつたりと言つことになる。

우리가 하브오크 신様은, この魔法の天才だつた。即興で、シス

テムの穴を突く……バグが引き起こされるような形で、魔法陣を組み上げてしまふんだ。

うん、普通は順にカードを並べてつなげてく位なんだけれどね。この人、なんか円になっちゃうんだよ、頭と最後が繋がっちゃうんだ……。

んでもって、破綻することなく、スタートから終了まで連結されたカードは、効果を延々と増大させながら循環させて、無限に威力を高めていく……。

結果、極大と呼ばれる魔法が、行使されることとなります。

「ハヴォック神がお怒りじやああああああああああああああ！」？」

...
[

「いやああああー！」机に向かないでー。机と机を巻き込まないでえええええー！」

ええ、盾にしますとも。非常時です。みんな自分の命が大事です。
最低とか言わないでください。じゅう、じゅうんー 暴れて逃げ
よつとすんなー

本能的に、危機がわかるようす……つていうか、ケダモノ的にも、空から降つてくるもんより、ねえさんの方が怖いんかい……。

「あんた、やっぱ後でしめる」

そう言つて、ねえさんは左に向かつて魔法を放つとした。

「どうぐすれ……」

「ねえさんそれやばいからーー！」

いやだつて、ほら、このゲーム、自分で魔法作れるからさ、自分で魔法に名前付けて、人に式を呪文書、魔法書として売りつけたり、固有呪文として隠したりとかできるからさ。

そこに厨二病患者と、オタクが居れば……あとはどうなるかわかるよな？

とにかく、ねえさんの指先から発射された赤い閃光が、空から落ちてくるものに直撃した。

ちなみにこの魔法も、運営から禁呪とされた魔法です。人に売つたり教えたら、アカウント削除だそうです。

運営……必死だつたな。

主人公はそうでもありませんが、ねえさんはチート組です。

落下まで二一秒。

「！？ 高エネルギー反応つ、来ます！」

「なに!?

直後、レイドは耐G仕様のジエルに満たされたコクピットの中を、それでも投げ出される勢いで衝撃を受けた。

『...ウニ、ウニ、ウニ、ウニ、ウニ、ウニ』

ねえさんが唸る。

術式の円環を、魔力が循環し、魔法が限界にまで熟成される。

トロールの失敗を左右する。

力に達していた。

「弱かつた？」

魔法の効果時間と、破壊力は、術式を組んだ時点で決定されてい

る。

ることは不可能だ。

となれば、ドラグ レイブを選んだねえさんの失敗だと言つことになる。

地表に放てば、一面がぶつ飛び、焼け野原どころか、灼熱の溶岩地獄が形成される魔法なんだけど、落ちてくるやつは、バリアっぽいのを張つていた。

平面を組み合わせたような形状をしていて、それがねえさんの放つたビームを弾いている。

「なんだあれ……隕石じやない……」

俺は、ことりんを抱き上げたまま、呆然としていた。
バリアは角度がついていて、受け流すような感じだったが、弾かれたビームは幾状にも別れて、散つていった。
障壁とか結界つて言葉じや、違和感を感じる。

あれは絶対、バリアだ。

かつけー！

艦底部に張つた四角錐のバリアは、墜落時の衝撃を緩和するため用意したものだった。

決して地上からの攻撃を想定していたものでは無かつた。

それだけに、消耗されるエネルギーが追いつかず、出力が姿勢制

御へと回しているHンジンから奪われていく。

「対空施設でもあるのかー?」

「いえ、人です。発射を確認、撃つたのは人間です」

「ばか言えー? 大気中で減衰されてるって言つても、人間が持てる携行火器程度で……」

「……素手からビーム出します」

「IJの星の人間は化け物か!?」

バリアは貫通されようとしていた。

「対艦砲並じやないか!」

「確認する時間はありません。バリア角を調整。ビームを真っ正面から受けます」

「なんでも、余計に……そつか! ビーム圧の抵抗をまともに受けて、減速する氣か!? だが持たなければ、貫かれるぞ!」

「やるしかありません。接地まで10」

……なんかバリアが盾みたいになつて、ねえさんの魔法を受け流さずに受けとめだした。

「なんか必死っぽいんですけど……ねえさんの魔法は、宇宙船でも耐えられるのか」

ねえさんは渋い顔つきになつてた。

「違う。防衛態勢じゃない。あいつ、」うちの力を利用して、押し戻されるつもりだわ」

「え？」

「減速しようとしている」と。速度を落とすためのつっこい棒代わりにされてる。あたしの魔法

よくわかるなあ。

「え？ こことはあれ……墜落中？」

灼熱の落下物……だけよ。

こういうのも、なんとかが七分に空が三分とか言うのかなあ。相当高いところにあるはずなのに、もう視界を埋めてくれてる。尖った艦首から炎が渦を巻いて後方へ流れてる。

ぽーっと眺めてたら、ねえさんに叱られた。

「フラグ！ 防御魔法！ 衝撃波が来る！」

「へいー。」

瞬時に換装。白いロープ姿になる俺。

そして指輪なんかのアイテムをじゅうじゅうと装着する。

どれもMPの最大値を引き上げるアイテムだ。

「こちらは相変わらず、背中から両脇に腕を回して抱き上げたま
ま。ほんと、この状態でも着替えられるって、どうやって成り立つ
てるんだろうな……。

ともかく、これだけ極端な装備をしても、ねえさんには及ばない。
魔法職の中でも、**極大魔法**が使えるくらいに、**極振りでカンスト**
させてるねえさんは、**特別な存在**だ。

こつちは、普通に編んだ魔法を使うので、精一杯。
威力を増す、ということは、それだけ、術式が複雑になり、制御
のための精神力が、必要になる。

何百メートル……キロはないと思うけど、十メートル単位じゃ明
らかに足りないっぽい宇宙船を、跡形もなく消失させられるような
魔法を使うには、ねえさんくらいに極端な育て方をしてないと、ど
うしようもないだろう。

……普段、下が素っ裸なのって……さつきちょっと見えたのは、
なんか白のチューブっぽいので胸隠して、下も白のパンツはいてて、
その上から胸の下までもないような黒の皮のジャケットに、前の空
いてるショートパンツとブーツで、アラサーのちょっとぽっこりと
した下腹部がパンツの際に乗つてて、良い感じに太くなってる足が、
えらいエロかつたけど……。

それ、普通のカジュアルですよね？

まさか、筋力不足で、まともな装備品を身につけられない……と
か？

ロープだけで必要筋力使い切つてるとか……ありえるな。
STR

まあ、そんなことを考えつつも、魔法はちゃんと展開しました。いわいる一つの絶対領域^{A フィールド}。耐物理攻撃特化型なので、魔法に対しでは効果が薄い。それから、俺ではレアアイテムを大量に身につけていても、一回張るので精一杯だ。

一定のダメージを受けると消滅します。まあ、RPGじゃ、ありがちな魔法だね。

「くつそおーーー！」

ねえさんが吼えた。

魔法が、赤い閃光が、ほとばしっていたものが、細くなつて、やがて途切れ途切れとなり、ついに消えた。

しかしその時には、船は俺たちの頭上を越えて、草原に向ひつの森林へと突っ込んでいった。

衝撃波が俺たちの周囲五メートルの円形領域を回避して流れいく。

「削りきれなかつた！」

いや地団駄踏むのはおかしいでしょ。
墜落してゐるのわかつてんなら、助けてやつてよ。

そして大地震と衝撃の波が、木々を巻き上げ大地を吹きさらして襲つてきた。

まるで土砂の津波だな……。

……魔法が持つても、俺たち、生き埋めになるんじやね？

時間をかけると足したい設定が増える病気。

大地にバリアが溝を穿つ。

掘り起こされた土砂が割れ、飛沫となつて、高く散る。バリアというボードに乗つて、船は大地をサーフする。

「くああああああ！」

レイドが砲える。

ざつと五キロは溝を掘つて進み、ようやく機体は静止した。バリアを消し、重力制御によつて、ゆっくりと艦の底部を接地させる。

ただし、重力制御は解かないままだ。もしも重力圈下で制御を解けば、船は自重で潰れてしまつ。

うまく彫り込んだ溝の形と、艦の底の形とが一致していく、船は傾くことなく、落ち着いた。

ふうっと、レイドは息を吐いた。

ジエルに気泡が混ざる。そのジエルが排出されていく。

「状況報告」

シリフイードが事務的に報告する。

「ダメージコントロールを最優先に設定。生命維持装置には問題なし

「飛べるか？」

「無理ね。向こう一年は修理に費やしたことじゅうよ

彼はため息をこぼしつつ、背中を深くシートに預けた。

「そりか……まあ、帰る方向もわからないしな」

「バカنسスに向いてるかどうかは、わからないけど……」

レイドは、外の景色をノクピットに映した。

「野生的な世界だな」

「バリア突破時に、軌道上にシーカーを配置しておいたんですけど、見ます?」

「なににあるのか?」

「見ればわかるとしか……」

「……映してくれ」

そして彼は啞然とした。

「なんだこの世界は……」

そこには、剣を持つて、竜と戦う者たちがあった。

竜はシルフィードよりも巨大で、人などその爪の先ほどの大さでしかないのだが、彼らは魔法と罷り、そして刃によつて、竜を巧みに追い詰めて行く。

あるいは、魔法が小さな鬼たちをなぎ払っていた。

イボだらけの、緑色の肌をした、子供ほどの大きさの鬼たちが、堆積した埃に足跡を残しながら、廃墟の中を駆け巡る。

手には粗末な槍やこん棒を持ち、土を固めて作られた、四角い家屋の合間や、時には中を駆け抜けて、逃げ惑うものたちを攪乱している。

建物は、宗教が生まれるような文明レベルの生活圏で、よく発見されるような家屋だった。

海を渡る船が、触手のようなものに引きずり込まれていく。

巨大なガレオン船が、中央部をまたいだ触手に二つに折られ、悲鳴をあげながら沈没していく。

そして、百万人規模の街があった。街は堅牢な城壁によつて守られており、中央には城があり、そのベランダには、見事麗しい少女がいた。

そんなわけがないのに、彼は、彼女と目が合つたように思えてしまった。

「なにか？」

「なんでもない」

答えるながらも、レイドは、意地の悪いやつだと、内心で悪態をついた。

管理コンピューターであるシルフィードが、パイロットが注視しているものを、把握していないわけがないのだから。

「どういう生態系の世界なんだ、思つてな……」

ありえない、といつてコアンスが含まれている一言だった。

高空から捉えられた映像には、人だけではなく、たくさんの、動物や植物と混ざり合つたような容姿の者たちが、映し出されていた。

まるで進化論を否定している。

「おかしいだろ、これ……」

そうですね、と、シルフィードも同意する。

「見た目だけでなく、映像から判断できるだけでも、生物の筋力値が、ありえないものになっています。有機生命体としては異常つてレベルじゃないですね。パワードスースを着てる人間よりも大きいかも……」

「マジでか……」

「全長十……十一? メートルの竜のような生き物ですが……これも1G下で生存できる形態ではありますね。自重で潰れない理由がわかりません」

「ほそりと、空を飛んでるのもいますし、と追加する。

「あの魔法っぽいのはなんだ? 特殊能力か? ESPか?」

「不明です……が、大気に大量のウイルスを感知しました」

「なに?」

「ナノマシンの亞種のようです。大気中に酸素と同じ含有率で漂っています」

「それは、呼吸ができないだろ……」

「はい、ですから、この世界の人間は、強化人間であるか、^{アバタ}代理人
体ではないかと」

「そうかと、彼は考え込んだ。

アバターは、そう珍しいものでは無い。

量子通信の可能領域であれば、人はアバターを自分自身として行動させることができることができる。

これは危険な作業を代行させる以外に、遊興目的でも活用されているものであった。

この惑星で活動している人型知性体の正体がアバターであるのなら、これくらいの遊びは普通であろう。

「それが、あの不可思議な能力の原因か？」

「ナノマシンが事象を構築しているのでしょうか。演出として見せているのかも」

「だからって、対艦砲並みの魔法ってのは……」

「メインプログラムが消失して、リミッターが働いていないのかもしれません」

「暴走してるのか……」

「あるいは、管理者がいなくなってしまったために、拡張プログラムを止める者がいなくなってしまったために、走りすぎてしまったのか」

管理者がいなくなつた……か、と、レイドは切なそうにこぼした。

「救難信号は、この星からのものだつたんだよな……」

「……はい。いまは消失しますが、間違いありませんね。発信源はここです」

「内容の解析は？」

「助けてくれとしか……」

「想像することしかできないか」

「移民船であったのか、商業目的の船だったのか、娯楽使節団だったのか……」

一人で考え込む。

「生きるために、惑星改造をやつたんだろうな……」

「ありますね。船^{わたし}がぶつかつたのは、1G環境と有害な宇宙線の反射、吸収、それから大気の流出を防ぐ目的の、惑星規模の防護結界だったのでしよう」

「ウイルスは、環境構築のためのものか」

「その後、この星に根付くために、擬似的な生態系を確保する必要に迫られて、大規模な舞台を設置。キャラクターを配置し、演目を開始。環境を整えさせて、その上位に位置する者として、生活し、滅んでいった……アバター やキャラクターは、活動させるためにか

なりのエネルギーが必要になりますから、供給の手間を省くために、ウイルスとして拡散したのかもしません」

「子孫くらいなら残ってるかな……」

「そういうあなたのなら、リミッターも、もともと排除していたのかもしれませんね。遊興目的ならコーナーの安全について配慮する必要がありますけど、実際的に入り用であったのなら、かける必要がありませんから」

「そんで、そいつらが、繁栄を続けて増えていくてる、か……」

ビーッと、警告音が鳴った。

「なんだ？」

「人が近づいてきます、先ほどの攻撃を行った者たちです」

「無事だったのか……」

「らしいですね」

「呆れたな……。まさに人間じゃないよな、少なくとも生身の……」

「どうしますか？　と尋ねられて、彼は迷った。

「文明レベルをどう見る？」

「おそれらしく、未開文明と大差ないかと。科学の発達は認められませんから」

「」の場合の科学とは、内燃機関、油圧、電子機器の存在であった。

「そいつらについては？」

「わかりません。プログラムに支配されている状態なのか、それとも自律行動しているのかは……」

「自律行動だと厄介だな……生きているのと変わらないから」

生まれ落ちた形が違うだけ、という話になってしまつからだ。
アバター やキャラクター の形状は、遺伝子に紛れ込ませたものが決定しているにしても、それ以外の部分では融通を利かされていて、彼らは子供を作ることすらできるのだ。

しかし、生まれ落ちた子供には、その父母となつたオリジナルのようには、管理者権限による強制が働くかないという問題があつた。

単純に、思考を焼き付けられたタンパク質の人形ではなく、意識を持つて生まれ落ちることとなるからである。

「どう考へても、一世代目、一世代目つて程度じゃないだろうし、程度を合わせる必要があるだらうな……」

「なら、シナリオロ -12はいかがですか？ 知的レベルが未開文明と同等なら、神とか勇者には弱いかもしません」

「そういうの、苦手なんだけどなあ」

しかたないかと、彼はシートを倒した。

シートのヘッドレストが変形し、彼の後頭部と顔の上部を覆う。

腕と足も、変形したシートに固定された。

「体の安全は頼むぜ、相棒」

「はい。アバターを起動します。あなたは勇者。わたしは精霊で」

「了解だ」

チヨニツクにマントという、旅装備にチエンジです。

ことらんは肩の上です。後頭部に張り付かせてるのは、あの船のえぐつた地面が、どえらい熱を放つていてるから。

その溝の脇を、燃えようとする木々を鎮火しながら進んでる。

鎮火方法はねえさんの魔法だ。視界を奪うための魔法の一つで、天候操作、雨の魔法。

前にやつてたらしい暗殺者のゲームにドはまりしたねえさんは、魔法について、暗殺者が行動するなら……という思考のくせから抜け出せず、補助的なものを多数編み出して隠していた。

隠していたのも……手の内を隠すのは当たり前だという話から。

ちなみに名前を見れば、なんのゲームだか……わかるよな。

ことらんには、黄色いパーカー着せてます。フード付き。

雨靴か長靴も作るかな、今度。

「雨と熱で蒸気が凄いッスね」

「……この距離での大きさでしょ。宇宙人なのかな。でかい船だ

わ

電磁フィールドとかなんだろつか、雨が弾かれて、球状のドームが傘を作っているのがわかる。

「円盤じゃないんスねえ……」

「これ、イベントだとと思う?」「…

「微妙ー」

ねえさんも、そうよねと顔をしかめた。

運営なら「これくらいのことはやりそつだけど……」。

つけ狙いでな!

でも俺には、地形が変わるってのが、引っかかるってた。

ここまで地形に変更を加えてしまうと、拡張コンテンツの追加購入や、発生条件を満たしている人間、いない人間で、見える景色に差ができるすぎてしまうからだ。

多人数参加型のゲームで、これはないと見えるんだ。

場所だつて、そう高いレベルのキャラでなくとも、遠征して来られる場所だし、船の大きさも、森の外からでも観測できるものだろう。

なら、これは、ゲームのクエストじゃなくて、この世界での、リアルな事件だつて判断した方が、妥当なんじやなかろうか。

「宇宙船が落ちてゐるよつた世界だつたとか……」

「ないわねー……」

剣と魔法じやなかつたのかよ。

「言葉、通じますかね？」

「システムが、通じるよひならぬ」

「システムって、ログウイングのことでですか？」

「うん、あれつて、万能翻訳機みたいなものじやないかな」

「俺たちと、この世界との仲立ちはしてくれてますけど……宇宙人さんにはどうなんだろう？」

「あたしは、この船の連中が、システムを管理してゐる奴なんじゃな
いかつて、疑つてゐるんだけどね」

「だったらと思ひ。

「相手は、神様ツスか？」

近いだらうねと言つのが、ねえさんとの見解だつた。

メニューにシステム、それにクエスト。どこかにこれらのプログ
ラムを走らせてくるシステムがあることは間違いないんだから。

「じゃあ、この世界つて、宇宙人の箱庭だつてことですか？」

「異世界じゃなくて、異星とか……」

「俺たち、転生じゃなくて、アブダクションされたとか！？」

「どうなんだろ？ねえ？」

「船の中からは、タコとかイカとか、そんなのが出て来るんですかねえ」

タコイカと聞いて、ことらんが体をゆすり始めた。
やめて！ けつこうぐらつくから！ わくわくしないで！
俺としては、グレイが良いかなあ。タコといかは、ことらんが狩りそうちだから。
……虎って、イカで腰抜かすのかな？

まあ世界の大半が、俺たちと同じ人間型なんだから、この船が無関係でないのなら、あんまり心配する必要はないんだろうけど。

そんなことを思いながら、俺たちは溝に下りて、船の後部、巨大な口ケットノズルっぽいやつの下にまで、近づいていった。

三十歳だけHロボです w

船は、自分で掘った溝に、木々を押し倒した形ではまつていた。
見上げる。でかい。予想以上だ。

「グレーティング 閻竜よりは…… 小わこですかね？」

「どうだろ？ ホワイトグレーティング 白竜くらこじやない？」

……下手なビルより高いよな、これ。
学校の校舎でかいか？
とにかくでかくて、見通しの良こと「ひからみないと、よくわからぬ」。

近くまで寄る。船自体の熱はあっても、延焼するほど強さはない。
く、落ち着いていた。

ねえさんの魔法のおかげだらうけど。
溝はぬかるみ始めていた。というか、雨水が流れ込んできて、川のようになり始めている。
ねえさんが雨の魔法を消す。

すぐに雨雲が消え、もとの晴れやかな青空が戻った。
俺たちは溝を上がって、今度は船首へと向かつてみた。

「鬼が出るか、蛇が出るか……」

くつー！ 言つてみたい台詞を取られた！
なに横田に、にやりとか！ くやしい！
とかやつてると、船に急激な変化が訪れた。

船体から、光の粒子が立ち上った。

それらは徐々に数を増して、密度を濃くし、人の形を取り始めた。船首から後頭部を起こすように、仰向けになつていて、巨大な女性の像を象っていた。

落ちていた髪が、ばさりと振られて、背に落ち、胸に流れた。こちらを見た……と思った次の瞬間、それは消失し、俺たちの前に、一人の男が立つていた。

男は白い胴甲冑を身にしていた。

タワーシールドと、長剣を身に帯びている。
二十歳代だろうか？ 後半っぽい。

うーわーと、俺とねえさんはなんとも言えない顔つきになつてた。
おーおー！ と、ひとりことらん、大はしゃぎ。
ばこんばこん痛いから！ にくきゅうハンドで叩かないで！ あ
たま痛いから！

男は顔を上げると。

「やあ」

……と、人なつっこいつな笑みを見せた。

彼はきょひきょひとすると、自分の背後へと問い合わせた。

「「」が新たな世界なのか？」

「はい、勇者様」

その右後ろに、さつきの巨大な女性が、人と同じ大きさになつてたたずんでいた。

つま先が地面に着いてない。
浮いていた。

その人は光を纏っていた。

白く透けた肌を持ち、光の粒子を乱舞させ、絹の衣を纏っていた。ちつ、さつき素つ裸だったのに、なんで服を着てるんだよ……。ついでに衣が透けてるんだが……なぜか見えてるのは肌色じゃなくて、その向こう側にある宇宙船の外装だ。

ねえさんの呟きが耳に入った。

(テンプレ女神k t k r)

俺としては精霊様を押したい。

……と、そんなことを思つてゐるとは考へてもいらないんだが。勇者と女神様は、台本でもあるみたいな会話を続けてる。

「く……くくく

「ね、ねえさん？」

なんか三文芝居がツボに入りましたかね？
ひつじょーに嫌な予感に襲われた。

「あなたが……その、勇者様、なの？」

男はねえさんの問いに答えた……。

「俺は、役割を持つて誘われたものです。この白のゆりかご」^{ヒダナ}

「ほー、へー?」

「?……信じられないかもしません。だけど、俺はこの世界の人間じゃない。もしよければ……」

ねえさんは顔を伏せ、髪で顔を隠し……なんか震えてるんですけど?

「ああ、もう、フラグ……あたし、限界だわ」

「……あこやー」

「ねえ、勇者様……」

じりじりと下がる俺。

「なんですか?」

「証明……してくれます?」

「なにを……!?」

ねえさんが、ローブから右腕だけを突き出し、無詠唱でビームを放つた。

自称勇者が身を横にして、間一髪で避ける。だがおしい!
それは対象を指定して放つ魔法だ。

当たつて初めて発動するという系統の魔法は、避けたところでア

ロセスが完了されていなかったため、実行は当たるまで継続される。当たるまで追いかけるそれは、自動追従型と言える魔法だった。

「くつ！」

勇者は盾で魔法を受けた。

勇者の姿を覆うように、歪みが見えた。

「バリア！？」

構えられた盾の前に、ビームは幾つにも別れて散らされた。

「ならー！」

今度は雷撃を放つ。

「無駄だ！」

これもまた、電はsparkしながら、歪みの前に拡散させられた。間近くに居たためか、女人人が一瞬ふれて見えた。
そのぶれかた……映像の上に走ったような櫛形は……。

「ノイズ？」

俺がいちいち驚いていると、勇者が慌てて待つをかけた。

「待ってくれ！ 爭うつもりはないんだ！」

勇者、必死だな。

「俺たちは敵じゃない！　だが、問答無用となれば、相手をせざるを得なくなる！」

「上等…」

「なんだと…？」

ねえさんが飛翔魔法で飛び上がる。
なんだあれ……」のゲーム、マジで空飛べたんか……。

黒のマントを巻き付けて空を飛ぶねえさんに、勇者たちが動搖を見せる。

「ＥＳＰか…？」

「いえ、大気成分に混成しているナノマシンが、重力制御場を形成しています」

「重力制御！？　ナノマシンが？　ウイルスじゃなかつたのか？」

「そうでもあり、そうでもない、ということのようです。彼らの肉体は、その作りの異常性から、多量のカロリーを必要としているようです。ナノマシンはウイルスとして、人外の運動量に見合った高カロリー栄養素として消費される形の他、本来の、ナノマシンとしての役割、魔法のような非科学的な現象を演出するものとして、活動もしているようです」

「キャラクターの思考に、ナノマシンが反応し、現象として構築してみせているわけか」

「やつなりますね」

ねえさんが、やつぱつ……と、くつくつと笑った。

「ダウトおー。」

「はーー?」

「なにが勇者じゃー。勇者とかゆりか」とかいう奴が、ナノマシンとかウイルスとか言つかー。そいつはどう見ても宇宙船だしー。あんたは大根役者でー。そこの女はホログラフでしうがー。本当にありがとうございました!」

ねえさんは頭の上に両腕を掲げた。

生まれた火の玉が、広げるのに合わせて、火球へと育つていく。勇者が焦つて待つたをかけた。

「待てつーー? 君は科学がわかるのかー!」

掲げた火球を放り落とす。

「君たちはキャラクターーやアクターではなく、プレイヤーなのかー?」

プレイヤーだと?

俺とねえさんは、同時に反応していた。

ねえさんには、その単語についても、報告していた。

獣王が口走ったものとして。

だけど、ちーっと遅い。

実行後の魔法は消去できない。

やばいなー、あれ、レーザーと違つて、火球だからなあ。
落ちた後も燃え広がるんだよなあ。

雷撃の魔法は盾……風味のバリア発生装置だよな、あれ。あれで
対処してたけど、あのバリア、全周囲から襲つてくる熱が相手でも
身を守れるのかな？

……無理っぽいな。

灼熱地獄に生身とか。あの人、死んだな。

なーむー（ - 人 - ）

安全圏から、お祈りしてみたら、ことらんも頭の上で、真似をし
た。

なむなむ w

「わたしが！」

女神様が炎の前に出て、両腕を広げた。
なにかその周囲に……あれ、ウインドウか？
十以上のウインドウが開かれ……つて。

俺は目をまるくした。

「ウインドウだつて！？」

しかも、あれ、メニューとか、ステータス画面じゃない！
コントロールパネルか！？

女神様が何かを実行し、両腕を前に出した。
両手を前に、魔力っぽいのが渦を巻いて放たれた。
火球が魔力にほどかれていく。
削るように、帯となつて、端から消失していった。

分解された！？

その力は炎を消すだけにはとどまらず、余波が姉さんをへと襲いかかった。

ねえさんが体に巻き付けていたロープを巻き上げて、強制的に大きく広げた。

「きやー！」

演技じゃない、それは中の人の声だった。

俺たちは真後ろからお尻を、正体不明の宇宙人共は……たぶん真っ正面から見上げる形で……。

……ねえさん、なんでまた素っ裸になつてるんスか。

マントを巻き付けてたの、また裸になつてたからなんですね。

いたたまれない空気が流れつた……。

「なんでまた脱いでんだ、あんたは」

ねえさんが、きゅーっと赤くなつていく。

「ばかあ！？」

「ちょつ！？　だめ！　それメテオストライク！？」

「俺の上に！」

「ばかやろー！？」

「なんでこっち来る！？」

「空間を裂いて現れる、直径十メートルほどの岩塊。」
「どうらんと一緒に逃げ惑つ。

くつと赤くなりながら、ねえさんは体をローブで隠した。

「あんたたち、一体、なんなの！」

「いや良いから！　今は良いから！　かつこよく振り向いてなかつたことにしてないで！　顔真っ赤なままだし！　こっち助けて！」

「擬体からのコントロール波を感じ。ナノマシンの活性と、空間干渉を確認。彼女が使用しているものは、改造型のアバターです」

「あなたは、やっぱり、プレイヤー、人間なんだな！」

「お前らもこっち見んかい！？」

「ゲームじゃねえんだよ！　突っ込みで隕石落としどかねーよ！
リアル舐めんな！？」

「あんたたちは、管理者なの？」

「君たちは、難破船の生き残りか、子孫なのか？」

「無視すんなや」「あー！？」

装備チェック。打者モード。バットを構えて三人へ。

「ばかっ、やめなさい。」

気付いたねえさん。でも遅い。

このバットは、運営が、某虎印の球団が優勝した記念に作って配ったチートアイテムだ。

その身には、制作者がもらつたといつサインが、レンダリングされていく。

地に伏せたことじんの頭上で、俺は隕石の真芯を捉えて打ち返してやつた。

どんな魔法も、芯を食えば打ち返せるという……ただし、スキル補正は無し。

純粹に、使っこなしたかつたら、生身でバット振つてこいつという酷いものだった。

ちなみに制作者が、優勝」と云ふと云うフラグを立ててくれたためか、虎印さんの優勝は、どんどん遠くなつて行つてゐみたいですね（・・・）

「ファースト」ノンタクトは誤解ではじまり対話に続くところを感じ。

「だつてしかたないじゃない。」のローブ、生身との接触部分が多ければ多いほど、増幅効果が上がるんだもん」

なん……だと?

驚愕するしかない事実だつた。

「なにそのエロ装備」

かーんつと、持つてたカップ投げつけられて頭に当たつた。

「エロ言つな！　付加装備なんて、干渉を起こして、もつと下がる
し……」

脱ぐしかないのよ！

言い切つた。

言こと切つたよ！」の人。

「漢だ、漢がいる……」

「どうゆー（涙）

「俺、一生着いて来ます！　ねえやん！」

感動にむせび泣いてくると、レイドさんとシルフィーちゃんに呆

れられてしまった。

「なんてーか、お前ら、緊張感つて知ってるか？」

「自分たちが、いま、じうなつてるのか……全然興味がないんですね」

うん、いま、そういう話をしました。

ちなみに、俺たちがくつろいでるのは、野営キットの拡張品であるテーブルセットです。

まあキャンプ仕様の組み立て椅子に丸机だけだ。

順番は、俺、シルフィードさん、レイドさん、ねえさんの順。ことらんは俺の膝の上。

最初は、船の中へと案内されたんだけど、めまいと吐き気とに耐えられなくなつたんだ。

どうやら、この人たちの言つてたナノマシンが、艦の中にはないから、ということらしい。

一応ウイルス扱いなんで、船が自動的に除去しちやつてるんだってさ。

それは、俺たちが入り込んでしまつているゲームキャラ、アバターフていう擬体が活動するために必要なものなんで、栄養失調、貧血のような状態に陥つてしまつたんだそうだ。それで、しかたなく、船の外でくつろぐこととなりました。

……船のうえに乗つかつてる隕石とか見えないんだからね！

「接触型の伝達フィルタとかスキンとか、そいつたものか？」

「なんスか、それ？」

「戦闘服の裏スキンフィルタ生地に使われてるやつだよ。レバー やスイッチを動かすより、直接的に神経系を走る電気信号を伝達した方が速いからな」

「……そこまで速度が必要になつても、動かしてるのは人間なんスか？」

「速度が上がつても、相手との距離が広くなるだけなんだよな。ドッグファイトと言つたって、低速なものでも太陽系の内輪と外輪くらいの距離で追いかけっこをするんだ。後は、機械だとどうしてもアルゴリズムを解析されちまうからな。失敗する人間、あるいは思いがけない選択を取る生き物の方が良いってこともあるのさ」

想像してみよう。

零距離からの居合いで勝負！

そりゃ思考する暇もない……けど。

十分な距離からの果たし合い。

確かに、ちゃんと抜いて斬りつけるだけの余裕が生まれてる。もつと広くなると、戦術とか戦略とかを練るだけの時間が持てる。距離が生んでくれる時間は確かにある……けど、それを行動速度が殺してしまうと……。

比率が一緒じゃね？

「ねえよ」

「あれ？ んじゃ、レイドさんが宇宙戦士だから、俺たちより神経伝達速度が速かつたりとか、そういうチートは？」

ぱたぱたと手を振られた。

シルフィードさんが補足してくれる。

「有機物で構成されている人体には、越えられない壁があるんですね」

「人の人、コンピューターだって話だけど。

「しつもーん」

「はいフラグわん」

「外なのこ、どうやって映像出してるんですか?」

ナノマシンって言われた。

便利だな！ ナノマシン！

なんでもありか!? ナノマシン！

「量子通信機を使ったコントロール波が、この世界全体を統括維持しているようです。発信源はわかりませんが……わたしは、限定期にクラッキングして、ナノマシンをコントロールし、この幻影を作つているんです」

映像じゃなく、ナノマシンが薄い密度で連結しているらしい。

「……ん？ てことはだ。

「もしかして、完全に実体化することもできます?」

「可能ですが……いまは無理ですね。システムの許容範囲を超える可能性がありますから」

許容と聞いて、俺は獸王のことを思い出した。

「システムに排除されるかもしない？」

「よくわかりますね。やつこいつです」

レイドさんが、やつこいつ意味でまだ、ねえさんのローブの裾をぺらりとめくつた。

「これ、この世界的には、ロストテクノロジーの一種とか、そういう扱いになるのかな？」

「うう」と、その両頬に左右からパンチがめり込んだ。

シルフィードさん！ 実体化してんじゃねえか！？

ぐらりと傾いで、ゆづくつとレイドさんが倒れていった。
後頭部から。

「ちんと痛い音がして、ことらんがびくんっと毛を逆立たせた。いかん、この人も突っ込みが攻撃系の人か！？」

あうち……うと、レイドさんが復活する。

「はは……でもま、よかつたよ」

「なんスか？」

「正直、石器文明どころか、知的生命体すらこないよつた星かもし

れないつて覚悟が、あつたからな

俺は、最初に聞いた話を思い出した。

「……宇宙漂流ですか……大変でしたね」

女神さんが、自業自得ですつ、とパンスカとした。

「たかがドッグファイトに熱くなつて、無限加速なんて行つかりです」

「いいじゃないか。おかげでこいつ面白い出会いがあつたんだし」

「飛ぶことができないわたしの立場は？」

「飽きたら宇宙に出来るや。生身の方は凍結したんだし。遊んでからでも良いだろ」

凍結？

生身？

俺が引っかかるると、ねえさんが先に尋ねてくれた。

「それ、どうこう」と…

「ん？」

「レイド、アバターに関するシステムのことですよ」

ああと、よひやくで理解してくれた。

「擬体つていうのは、人格憑依型として用意された擬体のことなんだけどな、自分の意識を^{アバター}写し込んで使うんだ」

「凍結つていうことは、その間、生身の体は、ちゃんと保管してないといけないってこと?」

「いや、そうでもない」

「え?」

「システムによつてまちまちなんだ。人間つてのは、いろんな記憶領域があるんだけど、その内の自伝的記憶つて言われる部分をメインにコピーが取られて、擬体に写し込まれる。つまり、移動じやないんだよ」

「擬体は、持ち主の意識体のコピーによつて支配され、行動します。その行動結果から作られた記憶を、元の人間に戻す形で、記憶の統合が行われるのが、一般的ですが……」

「つまり、コピーをバカنسに出して、本体は仕事をして、バカансの記憶だけ受け取つたり、自分の体はドックに入れて、擬体でバカンスに出かけたりな。あるいは、今の俺みたいに、どれだけ、どんだけのことになるかわからないから、オリジナルは安全な場所に確保して置いて、アバターで外に出たりとか……そういうわけだ」

「すげー……」

「なんじゃそりや。」

「魂がどうとか、そういうのはないんスね」

レイドさんが答えてくれようとしたけど、ねえさんの声がかぶつちやつた。

「じゃあ、あたしたちつて……」

「どうだうなと、レイドわん。

「正直なところ、わからないな。君たちは記憶や意識だけが、そのアバターにコピートレしてしまった存在なのか、あることはある」と[僕]しほまれてしまつていてるのか……」

「あれ? とつてのはなんスか?」

「記憶つてのは電氣信号だらうへー。信号なんだから丸」と根こじれをついていともあるつてこと?」

「わあ。

「んじゅ、あひの俺、真つ白つてこと?」

「案外、普通に生きてるかもしないぜ? もしかすると、そのアバターを維持してた仮想人格が行つちゃつてたりしてな」

「……それはそれでどうなんだろう?」

話してると、ふうっと、ねえさんの息が聞こえた。

「……まあ、いつか

ねえさんなり、やつぱりだつぱりなあつて思つてた。

「別に、あつちこ未練があるわけじやないしね

「モツスね」

あつせつしてゐなあと、レイドーカーとシルフィードをまな顔を見
令わせた。

「やうなのか?」

「うん、まあ、ね」

それじゅわからんだらうナビ……。

「俺もねえさんも、ドロップアウト組なんスよ」

俺たちば、これ以上を語るつもりはなかつた。

それくらこには複雑な事情を抱えていたから。

＾＾入れたかったけど、表示狂になつだし、やめとねました…残念…

ねえさんは隣の部屋の住人だった。

いつも、am non箱のお届け物が、俺の部屋、ねえさんの部屋という順序で届けられていて、その日だけ、間違つて全部ねえさんの部屋に届けられてしまつた。

……一件ともほほ毎日荷物が届くとか、どんだけだ。

ある日、荷物がこねーなーと思つていたら、ピンポーンっ♪

出てみたら、小動物みたいに怯えた幼女が立つっていた。
誤配達に気付かずに、荷物を開けてしまつたと。

まあ元々、間違えた配達員が悪いんだから、怒るつもりはなかつたんだけど……。

その時、俺の部屋の中がちらつと見えたんだが、ねえさんは、「うわあ！？」っと、いきなり部屋に押し入つてきた。

「フイギュアだらけ！？ ポスターも！ 貼つてあるのコンビニ限定チラシ！？ あつ！ 抱き枕！ 魔法少女まか！ 十八禁使用つて、シーツもだ！」

やめて！ 見ないで！ いたいけな瞳をきらきらさせないで！

「あつ、もしかして……」

ばたばたとお風呂場へ。

「らめええええええええ！」

「えつちなお風呂ポスターがびつしりー しかもアニメのばっかり
！…」「

ひいいいいいいい！

「ここはパラダイスなの！？」

良いじゃないか！ 独りもんの一人暮らしなんだから、給料なんて他に使い道がないんだから、良いじゃないか！

すみません、この状況を他の人に見られたら、俺きっと、通報されます。

お帰り頂く頃には、もつ今のねえさんになつてました。

怖かつたです。

幼女がにやつと……。

そんな俺とねえさんの出会いでしたのが、実はヘビーな家庭に育つておられました。

「学校？ 行つてないよ？」

「なんで？」

「行きたくないから」

どうも「両親が他界したらしいです。

んで、引き取り手の叔父夫婦は、遺産やら保険金やらを着服と……。

「テンプレすぎんだる」

「そんでも、誰も信じられないって、施設に駆け込もうとしたら、人暮らしして良いって言われたの」

「言われたのじゃねーよ。

あんた絶対、脅したろ。

「今のこと、縄引き状態なの。たまに市の人があざ子を見に来たりするから、部屋の中、あんまり凄いことにできないし」

GJ！ 市の職員さん！

あんたは、情操教育をわかってる！

「まあ時間の問題だけどねえ……そろそろ使い込みが遺産の三分の一くらいになりそっだから、頼めるところに頼んで……」

んで、まあ、偶然にも俺の両親兄弟が警察関係の人だったんで、伝手があるみたいなんで、信頼できる人を紹介してもらいましてね……。

あんまり、実家には関わりたくなかつたんだけどなあ……。

みんな警察関係で、俺だけ違つて言えば、大体わかつてもうらえ
る、そんな底の浅い家庭事情だ。

んでまあ、それからぐだぐだとありますてね、俺が面倒を見る」となりました。

家の連中にしてみれば、俺がまともな人間っぽこいとをしようつとじてゐからつて、手助けしてやるつと思つたんだらうござむ……。

ちやうもん！ ねえさんに齧られたんだもん！

実際、ヒキニートのねえさんば、コンビニへの買い出し要員が手に入つたと……一十四時間に使つてくれました（トトト）

……今では良い思い出……なわけねえよ……

はつと元の世界に戻つたら、シルフィードさんが俺の顔をじつと見ていた。

なんか痛ましかつて……いやそんな大した話でもないんだけどもや。

ねえさんば、ねえさんでした……つてだけのことです。

「未練はない……ですか」

シルフィードさんです。

まあ、そこだけ取れば、悲しいこと言つてゐなあ……つてことになるのかもしれんけれども……。

「厄介！」とや、面倒！」とから逃げ出したかつただけなんだよな。

んで、俺にとつても、きっとねえさんとつても、今は夢が叶えられたに近い状態なんだよな。

だから。

「だから、耐えられたのかもしませんね」

それは、その通りかもしないと、ちょっとだけ shinmiriとしてしまいました。

レイドさんも同意のようです。

「普通、ゲームの中に入り込んでしまったとか、異世界に落とされた、なんて状況になつたら、パニックを起こすか、元の世界に戻ろうとするんだろうけどな」

ねえさんが肩をすくめた。

「まあ、実際、耐えられなかつた連中もいたけどね」

「わうなのか？」

「ねえさん、それ、俺、初耳つスよ？」

呆れられてしまった。

「あんたは、気づかないで行っちゃつたでしょうが。チュートリアルよ。ひどかつたんだから」

あー……とか思つてゐると、いきなり爆弾投げつけられた。

「それで……君たちは夫婦なのか？」

「ふぼつと吹いた。

ふたりでいつべん！」。

「「「」じょ「へーだんを」」

「や、やつなのか？」

いやほんと勘弁して？

なにその誤解。

シルフィードさんまで、お願ひしますよ。

怖いわ！

俺たちが本氣で言つてるとわかつて、レイドさんとシルフィードさんは、困惑顔になつたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5067y/>

異世界転生THE（駄）フラグ（仮題）

2011年11月30日10時49分発行